# ゲームな世界！

サクヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゲームな世界！

【Ｎコード】
Ｎ１１６３Ｌ

【作者名】
サクヤ

【あらすじ】
常に死と隣り合わせのこの世界、名前はアース。人々は、生きていくためにモンスターと戦い続ける。そしてこの世界の果てを見るために、日々攻略を続けるなか、あまりに才能がありすぎた少年少女達がひっそり目立たず暮らしていた。偶然が重なって、彼らは出会い、絆を・・・なんてかっこいいことといってるけどそんなたいそうなものではありません！　主人公達が自由に暴れます。（ありがちな設定をすこしいじっただけな上に、無駄に複雑ため、説明に違和感があったり、無茶な設定があったりすると思いますがすいませ

んです・・・）

ファンタジーなのかな？ＳＦともいえなくもないような・・・

## ある日の、世界が歩き始めるきっかけ的な出来事（前書き）

あたたかい目でみてくれたらうれしいです。でも批判はうけつけます。ばんばんしてください！

無駄に複雑な設定のため、最初はめちゃ説明くさいです。やばいです。

## ある日の、世界が歩き始めるきっかけ的な出来事

キーンコーンカーンコーン・・・・・

機械的な音が学校中に鳴り響く。

この日、十数回目となるチャイムが鳴り、電子黒板の前に立っていた、なぜかいつもスリッパを履いている教師がすたすたと音をたてて教室から出て行った。

途端に室内が騒がしくなる。

これからどこに行くか予定をたてている者や、この街にも若干小さめではあるもののれっきとしたダンジョンがあり、そこへ『狩り』をしに行くためにパーティをつくっている者、少数だがすぐに帰宅しようとする生徒などであふれかえっていた。

俺は生徒と生徒の間をぬって進み、ようやく廊下へ出る。教室は広めだが、６０人もいればなかなか窮屈だ。

クラスはランクごとに分かれていて、学校に実力が認められている者程『Ａ』に近く、『Ａ』～『Ｇ』というふうに編成される。

基本的に、依頼をこなしていれば学校に実力をアピールできる。ランクが上だといろんな特典があったりするらしい。ちなみに俺がいるのは『Ｆ』クラスだ。

「ふわ・・・はぁ、今日はどうするかな・・・最近レベル上げもしてない、依頼も受けてない・・・って言ってももともと依頼はほとんど受けたことないけど。『F』だし。・・・まぁとりあえずダンジョンに行くか」

家には帰らず、カバンは学校に置いてそのまま行くことにした。歩いていってもいいが、面倒だから転移門に向かう。自分で転移するのもめんどくさい。MP減るし。実際痛くもかゆくもないけど。

門をつかえば、ギルドカードを見せるだけで一瞬で行ける。ギルドカードと言っても、学校自体がギルド扱いのため、学校に通っている者にとっては、その学校の生徒だということを証明する『生徒手帳』がそれにあたる。

綺麗にレンガで舗装された道を歩く途中で、ふと最近まともなメシを食ってないことに気づき、道中にあるなじみの喫茶店で軽く何か食べることにした。

15分ほど歩くと、小奇麗な店に着いた。名前は『喫茶店』。

開店したばっかりだから名前思いつかないという口実でつけた名前で、ずっとこのまま。・・・もう半年以上たつ。

中に入ると軽快な金属音が鳴り、客が来たことを伝える。・・・相変わらず結構入ってる。男の割合が多め。

とりあえずいつも座る窓際の席が空いてたからそこに座って、店

員が来るのを待つ・・・暇もなく、一人の少女がとことこ小走りでやってきた。

「サクヤ！　いらっしゃい！　久しぶりだね？　最近来てなかったけどなんか面白いことでもあったの？」

と、最後に首をかしげながら聞いてくるから、肩までの髪がいい感じに揺れる。可愛い系の美少女。

どれくらい可愛いかっていうと、たいしたレベルが高くないからあまり強いモンスターを倒せないためにコーヒー一杯でさえぜいたくだというくらいお金に余裕がないはずの男共がどうにかお金を工面してまで頻繁に会いにくるほど。とにかく、すごく可愛い。

俺は片手をあげて答える。

「ひさしぶり、ミナ。や、特に。最近ちゃんと自炊してただけ。つっても簡単なものばっかで飽きてきてさー。だから、これから街のダンジョン行くしついでに食べてこっかなぁ、と」

「どうせインスタントばっかだったんでしょ。作ったっていうの？　それ・・・」

「インスタントばっかではないけどな？　まぁ結構あったけど。料理本みながら頑張ったんだぞ！」

「ふぅん？　例えば？」

「ゆでたまご」

「えぇ！？　それつくるためにわざわざ本買ったの！？」

「いやいやいやいや！　ミナが例え言えって言うから！　しかもゆでたまご馬鹿にすんな！　あの、神な半熟加減のゆでたまごをつくるためにどれだけかかったと思ってんだ！」

「しらないわよ！　っていうかそんなことのためになんでそこまで・・・」

「正確に言うと、２ヶ月」

「ここに来なくなってからずっと！？」

「断言する、売れるぞ」

「そんな自慢げに言われてもいまいち凄さが分からないわ・・・」

ゆでたまごの奥深さが理解出来ないとは・・・料理人の娘として失格だな。マスターなら分かってくれるはず・・・いや実際、そこまで深いわけでもないけど、ここまでこけにされたら引き下がれない。

「とりあえずコーヒーくれない？　砂糖もクリームもいれて。量は任せる」

「今日はブラックじゃないんだね。了解！」

とことこ走って、ミナは店の奥へと消えた。後ろ姿も可愛いな・・・。

そういえばミナもたまにどっかのダンジョンに行ってるみたいだけど、どこに行ってるんだ？

ここらへんじゃないし、ここよりも世界の『内側』に行ってるのか？　だとしたらレベルは高くないことになるな。

実際にあいつからは強力な魔力とかは感じない、が・・・なにか、しっくりこない・・・隠してるような・・・でも俺から実力を隠し通すのは世界最高レベルでもむりだしな。俺にそういうスキルがあるわけではないが。

まぁおそらく、いや十中八九勘違いだな。うん。あまりにありえ

ん。

なんていろいろ考えていた俺の耳に、思考を塗りつぶすかのようにサイレンが響き渡った。なんらかの異常事態を示す、この街の中のみに聞こえる音だ。

瞬間、店内にいた客に中でも屈強な体つきの男が声を張り上げる。

「みんな落ち着け！　避難経路はトイレの左にある！　落ち着いて、女子供から先に外に出ろ！　客、店員問わずにだ！」

こういう事態は初めてではない。それどころか、割と頻繁にある。1～2ヶ月に一度ほどのペースで、街になんらかの異常事態がおこるなんて笑い話にもならないが。

そのせいでこの街の住人はある程度サイレンの音になれてしまっている。

だが、それでもやはりパニックに陥るのは避けられない。現に、あたりの店からは怒号が絶えずとびかっていた。

運よく、この店に少なからず場数をふんでいるであろう男がいたために、すでにこの『喫茶店』からは全員が非難したはず。

しばらくしてパニックがおさまりかけてきたころ、街中においてあるスピーカーから放送がかかる。

『警報レベル、９。正体不明のモンスターが、［ヴィアート］に存在するダンジョンに出現。推定レベル、不明。少なくともＬｖ．１００を超えているもよう。着実に［ヴィアート］中心部に近づいてきています。被害者はまだ出てきていませんが、早急に今から指定する避難所へ向かってください。現時点での避難場所は、～～地区が・・・・・』

途端にあちこちから叫び声があがる。

「警報レベル９！？　ほぼ最高レベルじゃねぇか！！　天災級の災害でもそこまで高くねぇぞ！？」

「ヴィアートってこの街じゃない！　冗談でしょ！？」

「Ｌｖ．１００以上って最前線並かよ！？　なんでそんな奴が、せいぜいＬｖ．２～３０のモンスターしかいないこの街のダンジョンにいるんだ！？」

大混乱に陥り、ぼーっと目を見開いて立ち止まっていたり、信じられない事実につぎつぎと文句を言う者、そして大半は完全なパニックに陥った。

これじゃ、避難場所も聞いてないだろう。俺はちゃんと聞いてい

た。俺達の地区、『Ｎｏ．１０』の避難場所はさっき『喫茶店』に行くときに通った道を１００メートルほど戻ったところにある馬鹿でかい公園だ。

こういう事態では、昔、毎日のように命をかけてモンスターと対峙していた頃を思い出してしまう。あまりいいものじゃないな。

逆にすっかり落ち着いてしまった俺は、とりあえずミナを探した。コーヒー頼んでたし。

だが、どんなに探しても俺の視界には入らない。

ミナ自身がもっている魔力をサーチしてみた。

相変わらず違和感のようなものを感じるかと思っていたが、なにも感じない。

不思議に思うと同時に、なぜか汗がふきだしてきた。

すでに流れ始めた汗をふきながら、パニックにはなっていないが明らかに動揺してしまっている、先ほどリーダーシップを発揮していた男を見つけ、

「ミナを見なかったか！？　いくら探しても・・・」

さえぎるように男も叫ぶ。

「さっきものすごい速さで転移門のほうに向かってったぞ！　くそっ！　ダンジョンに行く気か、ミナちゃん！　死ぬぞ！！」

## ある日の、世界が歩き始めるきっかけ的な出来事（後書き）

批判ばんばんしてください！とは言ったけどでも初心者なのであまりきつくぁ・・・ｗｗ　感想くれたらめっちゃうれしいです！！

**起承転結的にいうと、『起』・・・でもまだ一応プロローグ。**

俺は全力で走る

と言うより飛んでいる。

加速、加速、加速、加速！

魔力を身体中にめぐらせ、『速度』を限界まで加速（アクセラレート）する。

一瞬の加速なら超音速を出せるが、持続的な加速はそうはいかない。

それでも常識を遥かに逸した速さでダンジョンを駆ける。

道といった道がなく、草木が鬱蒼と茂り、もはや熱帯雨林。

そんなものにかまうことなく、俺は木を吹き飛ばしつつモンスターの反応を追った。

5、6キロ走っただろうか。

ミナがこんなに早く移動できたとは思えないが、ミナの魔力の反応もないから、とにかくモンスターへ向かい走り続けていた。

そして、ターゲットをついに肉眼で捕捉する

「う～ん・・・ナニこれ？」

デカっっっっっっ！！！

一人で『アース』の超奥地、Ｌｖ．８００前後のモンスターがうじゃうじゃいるダンジョンに毎日のように篭っていたあの頃から久しいが、ここまでデカいのはそんな俺でさえ滅多に見ない。

でも、必ずしもデカい＝強いわけではもちろんない。

現に俺が今までに出会ったモンスターの中で最も強かった個体はＬｖ．１３００相当だったが、大きさは１．５メートル程。

それでもあの迫力はすごかったけどな。

が、とりあえずデカいとある程度以上は強い場合がほとんどだ。

そしてこいつはとにかくデカい。

遠近感、距離がつかめない・・・ほどでもないけど。

俺が見上げてもそのてっぺんが見えない程に高い木がこのダンジョンにある。　なのに、その木もせいぜいあのモンスターの半分に達するかというところ。

ここから見た感じ、全長４、５００メートルはある。

とりあえず、ターゲットのレベルを調べる『識別スキル』を発動し、敵を見据える。

・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・はぁ！！！！！！！！！？」

俺の視界に識別結果が表示される。

［Ｌｖ．７３０］

確かにそう表示されている。

「て、てめ、どっから現れた！！」

こんなレベル、現時点の『アース』攻略最前線にだって出てこない。

アースに現れたモンスターの最高レベルは『Ｌｖ．１６７』ということに『なっている』。

実際には、何人いるかも知れないが俺のように、才能がありすぎたために社会に不適合の烙印を押され精神的かつ社会的に世界から敵視されるのを避けるため、レベルを隠し、金儲けもほどほどにひっそりとくらしているやつらがいくらかいて、そいつらはもっと高いレベルのモンスターを相手にしているが、一般には知られていない。

だいたい、自分の実力を誇示したがる人間ほど才能にはめぐまれないもの。いままでにも何度かそういった事件があったが、数える程しかない。

能ある鷹は爪を隠す、ってやつだ。

・・・また話がそれたが、こんな低レベルダンジョンにここまでの大物が現れることは絶対にありえない、はず。

なぜかこのダンジョンには、ここのレベルに合わないモンスターが度々現れる。

そのためこの街の住民は異常事態に慣れてる訳だが、やっぱり『警報レベル９』なだけはあったってことか。

まぁ今はミナの安全確保が最優先。

こいつを倒せばとりあえずは大丈夫だ。

違和感があるとはいえ、ミナはこのダンジョンのモンスターに遅れをとるほど魔力は弱くない。

他に強力なモンスターがいる様子もない。

だから・・・

「なんでこんなとこにいるのかは知らない。でもお前よりかはあいつの方が大事だからなぁ。ここで死んでもらう！！　・・・って俺めっちゃ悪役！？」

なんて一人言いながら、そして俺は止まっていた足を再び動かす。

「やっばい！　急がなきゃ！！」

ミナは自宅にいた。

まさかいくらトラブルメーカーなこの街でも、警報レベル９クラスの危機がせまるなんて考えてもいなかった。

ミナは苦笑し、慌しい動きの中で、ある記憶の一端を自分でも無意識のうちに垣間見る。

たった1年と数ヶ月前までのことなのに、その記憶は遥か昔のことのように色褪せていた。

それに伴い、ミナの危機察知能力も知らないうちに低下していたらしい。

まったくといっていいほどに非常事態に対策を施していなかった。

そのため、一度家に戻り必要な準備を整える。

「えーっと、んーと・・・これくらいでいいかな！」

回復用ポーション、それも現在『アース』のどこにも出回っていない、遥か奥のダンジョンで採取できる素材を使った特別製のものを数本と回復用結晶を2個ほど、その他いろいろを持つ。ずっとアイテムボックスに眠っていた、あの戦いの日々の産物。

「・・・モンスターのレベルは最低でも最前線以上。そんな化け物に対抗できる人なんてここにはいない・・・やっぱり私が行くしかない、よね。この街、気に入ってたんだけどな・・・。マスターとか、いろんないい人達に会えたし、サクヤとも・・・。・・・でもそんな弱気なこと言ってられない。行こう、ティナ！」

ずっとずっと一緒に戦ってきた、唯一心を完全に許せる友。

それはレアという陳腐な言葉では説明出来ないほどに珍しく、そして強い、モンスター。

それは使い魔とかそういう関係ではなく、ヒトなんかよりも賢くて人間よりも人間らしい、感情を持つ『友達』。

青く、高純度の宝石よりも美しく輝く身体を持つ竜のような外見の、ティナと呼ばれたその生き物は一声高く鳴いて友に答え、肩にちょこんと乗った。

大きさを自由に変えられるこの生き物にはまだ種としての名はないが、自分につけられた名は気に入っているらしい。

この生き物もまた、ミナをかけがえのない『友達』と思っている（おそらく）。

ミナはティナが肩に乗ったのを見、自宅の木で出来た綺麗なドアを、来たときからは想像もつかないほど落ち着いた動作で開ける。

「久しぶりだけど・・・うん、頑張ろう。私しか、みんなを守れないなら・・・！！」

そしてミナの姿は掻き消えた。

## やっと出会う二人　それでもやっぱりプロローグ・・・？（前書き）

毎回似たような終わりですいません・・・二人を同時進行させつつうまく繋げられる程度の文才さえないんです・・・あと、会話も絶望的に少ない・・・なんとか違和感がない程に独り言を言わせてはいるものの・・・あたたかく見守ってほしいです、すいません（ＴＯＴ）　違和感とか、「これはないだろ」って感じの表現とかあったら教えてください！よりよいものにするためにも・・・ｗ　感想とかも、待ってます・・・・・

## やっと出会う二人　それでもやっぱりプロローグ・・・？

「ふー・・・。近くで見るとこれまたでかい・・・なっと！」

やっと、目の前まで移動できた。

モンスターっていう物は、デカくなるにつれて索敵などといった繊細な感覚が必要な様々な能力が低下する傾向がある。

このモンスターも例外ではなかったみたいだが、流石に目の前までくると、ばれた。

だがこいつの身体はあまりに大きく、目の前に来たといっても地上において、だ。

それでも俺の接近に気づけたということは、この大きさを持ちながらも並以上の索敵能力がある、または比較的地上に近い、例えば足の裏などに索敵などを行う機関があるか・・・

まぁおそらくは前者だな。

そして攻撃方法は、殴る蹴る、尻尾をふりまわす、デカさにものをいわせてつぶす、ぐらいか。

攻撃方法やどこぞの怪獣のような見た目からして、多分、知能は低い。

だが、ただデカいだけで生き延びられるほどモンスターどもの世界は甘くない。

ここまで高レベルならここに来るまではそれなりの高レベル地帯にいたはず。

そんなところで生きていたのにこんな原始的な攻撃しかできなかったら、まずリンチされて終わり。

だから、高レベルダンジョンのモンスターはだいたいそんな大きくないかわりに知能と戦闘能力は高い。そのために超大型のモンスターは逆に数が少ない。

にもかかわらずここまで成長できたということは、他に何か特殊な攻撃方法、または身を守る方法があるんだろう。

敵の攻撃を加速（アクセラレート）しつつかわしながらも冷静に分析を行い、これらのことをふまえ、対処は簡単、と結論づける。

それでも油断はしない。

いまのところは対処に苦はないが、保有する特殊能力だけは、攻撃や仕草を観察し続けるもいまだ不明。

攻撃系なら、そろそろ使ってもいいはずなんだけどな・・・。

見た目に反して防御系か・・・？　もしある程度どんな攻撃でも防御できる術があるのなら、こんな原始的な攻撃しかできなくてもここまで成長したのもうなずける。

だとすると、それはこちらから攻撃してみないことには始まらない。

そろそろかわし続けるのも飽きてきた。

昔はいちいちこんな解析は行わなかったのに、長く、といっても1年近くまともな戦闘をしてなかったからか、慎重に、悪く言えば臆病になってしまっている。

まぁどんな言い訳をしていようが逃げることはもとより選択肢に含んでいない。

・・・やる。

そう決めた途端、忘れかけていた、全身の血が滾るような、力が身体中をかけめぐる感覚に思わず身震いする。

たった1年ぶりの、それでも確かになつかしい感覚。

俺は全身に溢れる力を感じながら、なぜか攻撃を止めたモンスターに対峙する。

「さて、と・・・一人であんなかっこつけといて、やっとまともな戦いか。久しぶりだけど・・・お前ごときに遅れをとるほど俺は衰えてないと思うぞ？　この世界じゃ、たった1レベルの差が天と地ほどの実力差を生むんだ。まぁせいぜい、俺が昔のカンを取り戻せるくらいには奮闘してくれ。手加減は、もちろんな『ズガーーーン！！！』しだ！！　って、え！？」

長い台詞を言い、最後の言葉を連ねながらさぁ突っ込もうとしていたサクヤの耳に強烈な爆発音が響く。

それは目の前に立っていたモンスターにものすごい威力の遠距離魔法が直撃した音だった、ということにサクヤが気づいたのはそれから数瞬後のことだった。

ブゥン。

ミナは、強力なモンスターの反応がある場所の近くの座標に転移した。

崖のようになっている所の頂上であり、遠距離から攻撃するためにここを選んで転移したミナは、そこから見えた光景に硬直するのではなく、生理的嫌悪からか脊髄反射で叫んでいた。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！・・・な、何よこいつ！！！！こんなのあり！！！！？」

あまりの大きさとあまりにグロテスクな見た目にミナの全身に鳥肌がたっている。

おそらく動きやすい服装を選んだのだろう、一枚のインナーにワンピースな格好なため、余計寒気が増しているはずだ。

そして叫ぶと同時にこれまた脊髄反射で即座に遠距離魔法陣を無詠唱で展開した。

ミナがかざした両手の平に、盾をかかげるような形で直径２メートルほどの魔法陣が展開される。

「うーーーーー！！　とにかくロケットランチャー！！！」

ミナが使う魔法は、この世界ですでに発動方法が確立されているものではなく、すべてオリジナルである。

よってミナしか使えないために、名前は、その効果をある程度示せればいいということで、だいたいその魔法を創り出したときのテンションで決まってしまう。

この魔法を創ったときは、何か腹ただしいことがあってむしゃくしゃしていてその怒りをなにかにぶつけようとしてどうしようもないテンションになっていたに違いない。

そしてものすごい密度を持った砲弾が魔法陣の中心からものすごい速度で飛んでいく。

風を切る音をも大きく響かせ、その砲弾はモンスターの顔面に着弾する。

すさまじい爆発がおこり、土煙が敵を覆う。

そして、モンスターがゆっくりと傾いでいき、倒れた。

またもや大きな音と共に土煙が舞う。

「・・・・弱っ・・・・ん？」

モンスターの近くを見下ろすと、ぼーっと立っている影が見える。

あの大きさ、あの形はおそらく人間だろう。

「んな、避難勧告出されたでしょう！？　なんでまだこんなところに人が！？」

モンスターを一瞬確認する。　と、まだ絶命していない。　どころか、ＨＰバーのまだ半分も減っていなかった。

モンスターの体力をさらに削るよるも逃げ遅れた人の非難が大事だと一瞬で判断し、悪態をつきながらも一緒に来ていたティナに少し大きくなってもらい、その背に乗ってミナは人影へと急ぐ。

次第に明瞭になっていくその人影は・・・

「さ、サクヤ！？」

## やっと出会う二人　それでもやっぱりプロローグ・・・？（後書き）

いきなり目線変わったりします。わかりづらかったらすいません。

## プロローグが終わりを告げる・・・（前書き）

やっとプロローグが終わった・・・でも戦闘はまだ続きます。
終わったっていうのかな??
あと、主人公の在り方?っていうのかな?を無理やり変えました。
かなーり違和感だらけですが、どーか温かく（以下略

**プロローグが終わりを告げる・・・**

「そーいや・・・デカい魔力反応あったな・・・」

多分、感情がたかぶり、戦闘態勢を整えていたからすぐには気づけなかったんだろう。

「にしてもこんな魔力・・・最前線レベルどころじゃないな。『天才』達の一人か。・・・・・・・・？　なんか覚えのある感じ・・・。過去に会ったことのあるやつか・・・？　でもここまでの魔力を持つやつなんか流石に知らないぞ。下手すれば俺にだって匹敵する・・・う、ぉっ！！」

モンスターが倒れる。

土煙がすごい。

ついでに音も。

ちらっと体力を確認するも、すでに半分近くバーは削られている。

音量に見合う威力もあったらしい。

Ｌｖ．７００以上の、しかも超大型モンスターのＨＰを一撃でこんな減らせるやつは、少なくとも俺は知らない。

それこそＬｖ．８００～９００以上はないと無理だ。

強ければ強いほど、より奥のダンジョンに行って出来るだけ自分に近いレベルのモンスターを討伐しまくらなければレベルは上がらない。

そのため、人の強さはどこのダンジョンにいるか、それだけで分かる。

特に俺はターゲットのレベルだけならば『識別』出来るため、正確なレベルが分かってしまう。

俺の交友の範囲で最もこの世界の外側のダンジョンにいたやつは、最後に会った時から成長してるにしてもせいぜい４００後半くらいだ。

だから、今モンスターに攻撃したやつは、それ以上に奥のダンジョンでレベル上げしていたということになるんだが・・・

まぁこの世界は馬鹿デカい。　いまだに、その果ては誰も知らない。最前線のやつらはもちろん、俺達のような『天才』も。

そして、誰よりも早くこの世界の『果て』なる場所を見るため、『天才』達はずっと戦ってる。

まぁやっぱり自己満足なんだろうけど。

そんなところが仮にあったとして、もし見ることが出来たとして、何が変わるというんだろう。

もしかしたら世界に劇的な変革が訪れるのかもしれないけどそんな保障はどこにもない。

俺も、自分に才能があることを知ってからはずっと果てを目指してた。

でも終わりのないひとりきりで戦い続ける日々に疲れ、俺はそういう疑問を持ち始めてしまい、ついには戦線を離脱した。

残ったのは、この世界じゃまだ出回ってない膨大な量のアイテム、それも超どころじゃすまないほどのレアアイテムと、この世界の住人が一生をかけても誰一人として辿り着けないだろうほどの域に達したレベルだけ。

そして、平穏を求めて辿り着いたのが、この街。

・・・話がすごーくずれたけども。

とにかく、この世界は大きい。　俺の知らない高レベルのダンジョンがあるのだろう。

そんなダンジョンでレベルを上げていただろう人間が、今、すぐ

そばにいる。

俺以上、ってことは流石にないだろうが、危険といえば危険な状況だ。

攻撃が当たった角度からして、モンスターの顔の真横、大体５００メートルほどの高さの場所にいると思っていい。

このダンジョンにはそのくらいの高さの崖がたくさんある。　というか、崖だらけ。

ここら辺は比較的、地平線が見えるほどに開けているが、それでもいくつかはある。

だから正体不明の人間は俺を上から見下ろすような場所にいるということで、俺は身を隠そうともしていないし、馬鹿正直に敵さんの目の前にいる・・・。

・・・うん、絶対見つかってんな。

などいろいろ考えていると、何か大きな物が風を切る音が聞こえる。

そしてそれは、確実に俺の方に向かってくる。

ってか速っ！

ばっ！　と音のする方を見る。　と、青く、このうえなく綺麗な、竜のような生き物が飛んできていた。

その背には、人が乗っている。

ん？　なんか見覚えあるな・・・というかあれは、俺がずっと探していたヤローじゃねぇか・・・・・？

青の竜の背に乗っている人影が、こっちに気づき、叫ぶ。

「さ、サクヤ！？」

「ミナ！！！」

竜は俺の前で停止する。

煙が盛大に俺にかかる。　・・・まさか狙ってねぇよな、こんな状況で？　それとも竜の独断か？

「こらぁ！　ティナ、駄目でしょそんなことしちゃ！！　・・・わ、私はもっと早く止まってって言ったわよ！？」

魔法で防護壁を張ってしっかり防いでいた俺は、ミナをにらみ付ける。

正直に言うけど、おそらく、まったく迫力なんかなかっただろう。
ミナは少しびびっていたが。

「まあいいわ。それより、なんでこんなとこにいるのよサクヤは！？　さっきまで街の中にいたでしょ！？　わざわざ来たの！？　なんのために！！　あんた馬鹿なの、死ぬの！？　とにかく早く逃げないと！！　ほら、ティナに乗って！！　あ、ティナはこの子の名前ね」

勝手に言いたいだけ言って、さっさと俺を乗せようとする。　・・・というか、ティナさん露骨に嫌がってますけど。

どうしようかと悩んでいるうちにふと見ると、モンスターが立ち上がろうとしていた。

そして無闇に尻尾を振り回す。

・・・本当に無闇か、あれ？

的確に俺達がいる場所を横なぎにしてきた。

「！！！　・・・ちっ！」

とりあえず、唸りながら飛んでくる尻尾に突撃し、とび蹴りで応戦する。

魔法を使うのがめんどくさかっただけなんだが、ミナが息をのんでいるのが分かった。

そして、ぶつかり合う。

大きな衝撃音がしたが、俺には大して反動もなにもない。

基本ステータスに差がありすぎるしな。

尻尾は吹き飛び、敵の身体自体も回転しながら飛んでいく。

1キロぐらい吹っ飛んだはずだが、身体がデカ過ぎるためにあまり離れた気がしない。

着地してミナたちの方をみると、口を半開きしてぼーぜんとしている（ミナだけ）。

「別に、そこまで驚くようなことじゃないだろ？」

まだちゃんと聞いてないが、おそらくミナのレベルならこれくらいはできるだろう。

「うん、まぁそうなんだけど・・・それよりもサクヤが『天才』の一人だったことに驚いてるのよ・・・はぁ」

「俺だって驚いてるぞ？　でも今はそんなこと言ってられない。さ

っさと倒して、・・・街に戻るか？　まぁおそらく俺達のことは、俺達が避難所にいない時点でとっくにばれてる。これでこいつ倒してのこのこ戻ったしたら、確実に誹謗中傷の嵐だけど。人っていうのは、才能あるものを簡単には認めてくれない。特に俺達みたいに極端に才能がありすぎるとなおさらな。とりあえずこれ終わらせて、これから先どうするかはその後考えよう」

「そうね・・・いろいろ聞きたいことはあるけど、全部後！！　じゃあ・・・いっちょ協力しますか！！」

モンスターも立ち上がり始めた。

・・・・・誰かと協力して戦うなんて、今まで一度も経験したことがない。

自慢じゃないが、俺はあまりに才能がありすぎたから。

学校で、誰かがパーティを作る話をしてるのを聞くたびに、そいつらを避けて歩いた。

だから、初めての経験に正直情けないくらい動揺してる。

でも、これが第一歩だと思う。

これをきっかけに、また歩きだせるといいな・・・

誰かと一緒なら、また世界の果てを目指せる。

すこしづつ、信頼出来る仲間を集めて共に進もう。

仲間とずっと一緒に戦えるのなら、こんな楽しいことはないだろ？

## プロローグが終わりを告げる・・・（後書き）

うわ・・・無理ある・・

すいませんです・・

## そして始まる閑話という名の過去（前書き）

過去です。
もう一話続きます。
でも次に更新するのは本編です。

## そして始まる閑話という名の過去

「ん・・・ちょっと血がついたな・・・。予想外、か。強かったな・・・」

たった今、Ｌｖ．９７０のボス級モンスター、［アクロ］が絶命した。

水属性の蛇のようなモンスターで、自在に水を生み出して常に自分に有利な状況をつくりながらも様々な特殊能力を駆使するため、かなり厄介な相手だった。

ダメージはほとんど受けなかったが、返り血がついた。

このこと自体、滅多にないことなんだよな、と思いつつ仕方ないので近くの街へ行くことにした。

服も身体も綺麗にするために。

「でも・・・流石に張り合いがない。レベルも結構上がったし、次はもっと奥に行くか」

俺は愛剣についた血を払い背中にまわし、とりあえず近くの街、［カーテン］に向かって歩き始める。

しばらく歩いた。

街の座標が正確に分からないから、歩いていくことにしたが・・・結構遠い。

まぁ急いでるわけじゃなし、ゆっくり行こう。

あくびをかみ殺し、無意識のうちに周囲へ索敵を行う。

・・・反応がある。人間？　こんなところで？

このダンジョンはモンスターレベルは高いが、出現頻度が極端に低い。

あるとき何も知らず足を踏み入れてしまった街の人間がいて、その人間はこのダンジョンの素材をみつけ、まだ世に出回ってない貴重なものと知ると、たくさんの素材を収集し、街へ持って帰った。

初めて見つけた人間が利己的ではなかったために、このダンジョンのうわさは瞬く間に広がった。

もちろん、たくさんの人間がそのダンジョンへ行った。

しかし、１週間ほどで違和感にきづく。

『戻ってきていない人が何人もいる』

それはダンジョンに向かった人達の、全体の１％くらいだったが、人々は恐怖した。

そして、ダンジョンへ向かう人間が極端に減り、暗い雰囲気のこの街に、ＨＰバーがかろうじて残っている状態の瀕死の人間が一人、帰ってきた。

その人間は言った。

『このダンジョンにはモンスターがいる。それも、すさまじい強さの個体が・・・』

それから、腕に覚えのある人間が何度も何度もダンジョンへむかった。

それらの人間は、２～３回目の突撃で、ぱったりと帰ってこなくなる。

それからは、そのダンジョンに向かう者はほぼいなくなった。

・・・かなり要約したが、まぁこんな感じだ。

それでも貴重な素材を求めここにくる者はいないわけじゃない。

いくら危険とはいえ、モンスターを避けさえすれば死ぬ可能性は高くない。

だが、そんな者はやはり超少数派。

にもかかわらずここにいる、ということは・・・

よっぽどの変人か、金、またはここの素材がどうしても必要だったか・・・

どちらにせよ、悪人じゃないなら保護するか。

という訳で、人間の反応があった場所へ行くことにした。

「ひ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

こんな・・・こんなはずじゃなかった・・・

ただ、お母さんを助けたかっただけなのに・・・

「・・・・・・・・・・・・・・」

目の前には、銀色の毛をもつ狼のようなモンスターがいて、無言で私を見つめてくる。

・・・お金が、必要だった。

お母さんが病気にかかって、私の家は貧しいわけではなかったけど、この病気を治すためにはすごく高価な薬が必要で、その薬を買うためには、お金が、必要だった。

だから、素材を手に入れるためにここにきたのに・・・

モンスターなんかほとんどいないんじゃなかったの！？

どうして、私が・・・

絶望した。

そして、死も覚悟した。

その瞬間、

パァァァァァァァァァ！！

と、私と狼の間に一筋の銀色の光が奔った。

あまりに速すぎて、どちらから飛んできたのかさえ分からない。

しばらくして光は消えたけど、私は意識が追いつかず、光の残像をぼーっと見つめていると横から突然声が聞こえた。

「おい！！　大丈夫か！？」

助かるなんて保障はないけれどその声は自信に溢れてて、私はなぜか心の底から安堵し、目からは涙が流れていた。

そしてなんとか意識の糸を強く手繰り寄せて意識をはっきりさせると、いきなり現れたヒーローを見た。

・・・どういうことだ？

なにも感じなかった・・・。

俺がこんな近くにいたモンスターに気づけないなんて、ありえない。

その非常識さは、俺が一番理解している。

だが現にこいつはここにいる。

レベルを識別する。

ちっ・・・

「お前・・・・・！」

レベルは１３００。

明らかに過去最高レベル。

そして・・・今の俺と全く同じ・・・・！！

１レベルの差が天と地ほどの実力差を生むこの世界では、相手よりレベルが１０高ければまず確実に安全だ。

人間同士の場合は一概には言えないが。

レベルが上がる度にある一部分だけを特化させ続ける人間がいるためだ。

もし俺と同じレベルの人間が魔法だけを特化させていれば、魔法に関しては俺は劣るだろう。

この世界じゃそういうシステムだ。

そして、同じレベルのモンスターと相対すれば、勝率は未知数。

しかもこの狼、確実にボス級・・・！

「やるしか、ねぇか・・・！」

サクヤは今まで生きてきて、おそらく初めてであろう、『本気』で狼へと向かった。

## やっと動き始めた主人公、そして世界も無理やり動かされ・・（前書き）

もうはちゃめちゃかもしれません・・・
おかしかったら言ってください・・・
これから頑張りますので・・・
感想とかくれたら更新スピードめっちゃあがります！

次話からは少し更新遅れます・・・

**やっと動き始めた主人公、そして世界も無理やり動かされ・・**

俺達はフィールドを駆け回る。

結局この大型モンスターは大規模防御魔法を使うらしい。

見た目に忠実じゃない。

攻撃系だったら楽なんだけどなぁ。

しかも治癒系魔法も使ってくる。

おま・・・それは流石にないだろ！？

でも仕方ないからちまちまダメージを与える。

いっきに倒してもいいんだが、正直ミナの反応が怖いため、俺は殴る蹴るで応戦していた。

でもそろそろ終わりそうだ。

・・・にしても、俺はまったく本気を出してない。

なのにＨＰがハイペースで減っていく。

よほどミナの攻撃効率がいいんだろう。

レベルはだいたい思った通りの数値だった。

その割りに魔法の熟練度は俺に匹敵する。

というか回復魔法、バフ（強化魔法）など、攻撃に関する魔法以外はほとんど俺とは比べものにならないほどに高い。

このレベルでここまでだと、本物の『天才』だろう。

天才と呼ばれている者達は、そのほとんどが、長い歳月を費やし地道に弱いモンスターを狩り続けていた人間だ。

ミナのように本物の『天才』はどれだけいるだろう。

少なくとも俺は、見るのはミナが初めてだ。

だが、ミナは援護に長けている・・・なのにどうしてこんなにレベルが高いんだ？

確かにあの遠距離魔法はすごかったが・・・それだけか？

まだ他にも戦闘方法があるんだろうな。

「サクヤ！　そろそろフィニッシュ！！」

見れば、最早モンスターの体力はレッドゾーンも半ばほどまで削られていた。

「了っ・・解っと！！」

とりあえず、サッカーボールよろしく思いっきり蹴る。

ものすごい効果音とともに吹っ飛んでいく。

そしてＨＰバーも吹っ飛んだ。

「これで・・・終わりだな」

「えぇ・・・」

終われば、あまりにあっけなく感じる。

というよりもともと、このレベルのモンスターに遅れをとることはまずありえない。

それにミナもいる。

ていうかティナは終始飛びまわってただけだったな・・・何がしたかったんだ？

・・・まぁ無事終わったってことでいいか。

さて・・・・。

「これからどうする？　とりあえず街に戻ってみるか？」

街に戻ったところで居場所はないだろうが。

「うん・・・出て行くにしても準備は必要だろうし。明日くらいまでならまだみんな避難所にいるから、早めに戻って、急いで準備して、そして・・・」

「いいのか？　俺はともかく、ミナはこの街でうまくやってただろ。それに、一人でどこに行くつもりなんだ？」

「どこって・・・。また、どこか遠い・・・普通の、平和な街に行くわ。この街に愛着がないわけじゃない。でも、仕方がないって・・・割り切ってるから」

「割り切る、か・・・」

寂しいことだとは思う。

俺もずっとそうしてきた。

でも、そんなことをする必要はないことに気づいた。

ずっとずっと、攻略を続ければいい。

一人が嫌なら、誰かと一緒に。

そんな単純なことにさえ気づけないほどに、俺達の精神は疲弊していたんだろう。

「ミナは・・・もう戦う気はない？」

「・・・分からないけど、もう、一人きりは嫌なの・・・。ずっと一人で、ただ戦い続けるだけの日々に、疲れたの・・・」

やっぱりミナも、俺と同じ。

変化を求めてたんだ。

変わりばえのしない毎日に。

なら、ミナも俺と同じように一歩を踏み出せるはず。

足りないのは多分、きっかけだけだ。

・・・それくらい俺がつくってやる。

「だったら、俺と一緒に行く？」

「・・・え？」

仲間を集めるなら、手を差し伸べることが大事だと思う。

たとえ断られたって、諦めないで。

決めたんだ。

「俺さ、また、世界の果てを目指そうと思う。そしてこの世界を攻略してやる。一人じゃ無理なら、仲間を集めて。だから今は仲間募集中。昔は一人で世界に挑み続けて、諦めた。だから今度は、仲間と一緒に！　・・・ってな訳なんだけど。どう？」

「・・・世界の『果て』、かぁ・・・。いいの？　私なんかが？　・・・サクヤと？」

「ああ。というか頼む。・・・俺と一緒に来てくれないか？」

「っ・・・！！　わ、分かった！　行く！　行けばいいんでしょ、行けば！　・・・もう・・・」

ミナはなぜか真っ赤になってる・・・照れてんのか？

・・・なんかそう考えるとこっちまで照れてきた！？

と、とにかく！

仲間1号が出来た。ついでに一匹もついてきた。

やっと、一歩踏み出せたんだろうか。

うん、多分。

「じゃ、じゃぁとりあえず街に戻るか」

「そ、そうね。早くしないとみんな戻っちゃう」

少しぎこちなく二人は街の方へ歩き始める。

・・・転移すればもっと早く帰れたことに二人が気づいたのは、

二人が街について転移門を見た時だった。

もうすでに日は暮れていた。

## さー行こー！（前書き）

今回は普段以上に短いです。

なにか、忠告とかあったらばんばん言ってください！

## さー行こー！

街は静寂に包まれていた。

おそらく、緊急の避難所にある程度人が集まったところでいっせいに街の外にある大きな建物にでも移ったんだろう。

２階建てのあの建物は、モンスター出現等による街規模の避難用に作られたものだ。

内部はホテルのようになっていて、街の住人約２万人が寝て起きることができるくらいの大きさを備えている。

俺も何度か入ったことがあるが、設備も普通のホテルとなんら変わりはない。

といっても、そう長い間こんなたくさんの人間が生活することは出来ない。あくまで『緊急用』。

だが、この建物が使われたのは俺がこの街に来てからたった二度目だ。

いくらこの街でもこんな規模の災害はそうない。

そして今回は確実に過去最高だろう。

ともかく街人全員が避難をとっくに終わらせ、一部では俺達に関する話が噂として流れているにちがいない。

良くも悪くも、この街の住人は仲間意識が強い。

今回、俺達にとっては悪いほうに向いたみたいだが。

「黙って出て行くのも後味悪いけど・・・明日を待つ、もしくは今避難施設に行くかするならそれなりに覚悟が必要だな・・・」

「私はこのまま出て行きたい。マスターとは少し話したい気もするけど・・・他の人たちにならいい、でもあの人にさえ冷めた目で見られたりしたらやっぱり傷つくよ。たとえ1年に満たない間とはいえいろいろよくしてくれたから・・・」

あの優しいマスターがそんな仕打ちをするか、と言いかけたが、人の心なんて簡単に変わるしな。

ミナにもいろいろあるんだろう。

だからこれ以上突っ込まないようにしよう。

「でも一応置き手紙くらいは残して行く。まぁもしマスターがそういう風に思ってるなら、見もせずに破り捨てたりするかもしれない。

けど、それは気持ちの問題だと思うし。お世話になったのは変わらないから」

・・・やっぱり俺とは違う。

なんかこう、根本的に。

俺なら黙って行く。

誰かと深く関わったことがないから言えるのか。

一人っ子だったと思う。今となってはそれさえ分からないが。

そして両親は、俺が、生まれて1～2年ですでにまわりから一般教養を吸収しつくし、すでに知識的な面では社交辞令さえこなし社会人として生きていけそうなほどにまで成長してしまったことに恐怖し、すぐ俺を捨てた。

兄弟もいなく、両親にもすぐ捨てられた俺には、だから誰かに恩を感じたりするミナの気持ちが分からない。

命を助けてもらってそれに感謝するとか、そういうことではないんだろう、きっと。

「それより、サクヤはどうするの？　学校通ってたでしょ。出て行くってことはやめるってことだよね。まさかこれからずっと最前線以上の『世界の外側』目指すのに、学校に在籍し続けるわけじゃないでしょう？」

「ん、もちろんやめるけど？」

「でも友達とかいたんじゃないの。そんなほいほいやめられるものかな？」

「そんな別れを惜しんでくれるような友達なんかいない。唯一心配事といえば、・・・・・・・・・んー・・・・うん、いくら考えてもやっぱり何もないわ」

「・・・・・・」

「そんな同情してるのが丸分かりな目でみないでくれるかな」

「まぁいいわ。ついでに、どのくらいの地位だったの？」

「クラスは『F』だった」

「あの『A』クラスでもせいぜい30後半くらいのレベルしかないあの学校で、『F』・・・そうとう弱い設定だったのね・・・でもたしか最低は『G』でしょ？」

「あぁ、なんか一回だけどうしても断れない感じの超簡単な任務頼まれたから仕方なしに受けてそれ成功させたら上がった。正直、あれはびびったな・・・。任務たった一回成功でランク一つ上がるって・・・」

「・・・そう」

「それでもたかが『F』だから簡単にやめられるはず」

「そっか。じゃあ・・・・そろそろ行きますか！」

「ん、一時間後に転移門前に集合でいい？」

「いいよ。私はそんな時間かかんないし。・・・・・じゃ、行ってくるね」

そう言い残しミナは、おそらくは『喫茶店』へと向かって走っていった。

俺は・・・とりあえず学校へ向かおう。

あー・・・本当に始まるんだな。

なぜだろう、これからはより死に近づくはずなのに・・・憂鬱だとか、そういった負の感情はまったくない。

むしろ心も身体も羽のように軽い。

なぜか、は考えないでおこう。

どうせよく分からないに決まってる。

とりあえずは・・・経験値を稼ぎつつ戦闘に身体を慣れさせるために比較的『外側』を徒歩で進もう。

そして情報収集もかねて、世界にもおそらくたったひとつしかないだろう『天才』達が集まる唯一の街、［Ｄｅｎｉａｌ（否定する街）］へ行く。

それが俺達の第一歩だ。

・・・・あ、でもまずは学校に行かなきゃな。

## さー行こー！（後書き）

く・・・・

# 攻略組ＶＳサクヤ（前書き）

## 攻略組ＶＳサクヤ

迂闊だった、というかなんというか・・・

警戒していなかった訳でもないが、特別していた訳でもない・・・

何が言いたいかというと、やつらを多少甘くみていたということ・・・なのか？

「ちょっとーどうするのっ？」

「どうするって言われても・・・」

「おい。貴様らは『何』だ？　なぜこの最前線で貴様らのようなガキがうろうろしているんだ」

これは・・・そうとうやばい状況だ。

何がやばいって、俺達は確実に疑われている。

それこそなぜだ、という話なんだが・・・

話は少し、といってもほんの数分前までさかのぼる。

俺達は、一応誰の目にもつかないようにひっそりと（あくまでも『一応』だ）『外側』へと向かっていた。

なぜ身を隠す必要があったかというと、それはやっぱり俺達が普通ではないからだ。

俺は１６歳、ミナは１５歳。

このくらいの年齢だと、Ｌｖ．５０に達していれば世界的に最高レベルで、将来性を買われ最前線に送りこまれたりするほど。

でもそれは表面上は『修行』の一種ということになっており、そこで戦えるほどのものはいない、と最前線のやつらは思い込んでいる。

本当に馬鹿なことだと思う。

さっさと『天才』を認めて共存でもなんでもすればいいのに、世界のトップの中でもごく一部のやつらは必死にその存在をひた隠しにしている。

そのごく一部のトップとやらもレベル的には『天才』を除けば最高値なんだろう、認めたくないのはわかる。

だがそれで、たったそれだけのちっぽけなプライドを守るために、見つけた『天才』を集団で、まるでモンスターを狩るかのように殺そうとするのは人間としてどうなんだ？

過去に一度だけ、そんなことがあった。

そして才能ある人間が一人、狩られた。

その、人間を狩った時のパーティにはこう伝えていたらしい。

『最前線近くに出没する人間のようなものがいて、それが最前線ギルドに参加していなかった場合、確実にモンスター、それもかなりの高レベルの人型モンスターだ』と。

普段は他人を『否定』している『天才』達もこれには全員が激怒した。が、何も出来なかった。

『天才』達の９９％以上は進んで人間を傷つけようとするものはいないから。

神、なんているかどうかは知らないがもしいるとするならば、神は才能を与える者を選ぶ、ということだ。

そして、殺されたとはいえ、その犠牲者は全ての『天才』達と深い関係は築いてなかったから、命を危険にさらしてまで仇を討とうと考える者はいなかった。

だから『天才』達は、世界のトップ（それを一部の『天才』達は『人を人だと思わぬ生物』と呼んだが、長いので俺は普通に『攻略

組』と呼んでる）を憎みながらも手は出せず、逃げる、避けるなど、消極的にならざるを得なかった。

革命を起こそうという意見も上がったには上がったが、やはり誰も受け入れなかった。

・・・俺にはすぐ話を脱線させてしまうくせがあるらしい。

とにかく俺達は進んでいたわけだが・・・うん、やっぱり油断していた。

攻略組とばったり出会ってしまった。

周囲に全く索敵もなにも施していなかった。

完全に俺のミス。

正直、冷や汗が止まらない。

・・・・どうする！？

「やばいわね・・・」

「・・・・・・・・」

「答えないのか？　ということはやはり貴様らはモンスターなのか？」

攻略組側のメンバーがざわめきだす。

１８人・・・ち。

随分本格的なパーティだな、くそ。

「・・・・・やるか・・・・」

「ッ！？　サクヤ！？　本気！？」

「・・・迷ってる。俺達のことが露見するリスクを０にするには全員殺すしかない。でも、俺はこいつらと同じように人を殺すなんてしたくない。・・・全て割り切って殺すか、逃げるか・・・」

「逃げよう？　やっぱり私は・・・」

「分かってる。でも、ここで顔が割れたら、もう二度とこの世界の全ての街に来られなくなるかもしれない。それほどあいつらは『天才』を憎んでる。すぐに全世界規模で俺達は指名手配に近い扱いをうけるだろうな。そうなったら、俺達が生きてく場所は本当に最前

線の遥か遥か奥のダンジョンしかなくなるぞ？」

「いいよ、それでも。私は。サクヤだっている。もう一人じゃない、だからどこでも生きていける。それに・・・［Ｄｅｎｉａｌ］だってあるよ。あそこは世界なんか関係ないでしょう？」

「そう、だけど・・・」

「・・・貴様ら・・・やはり、才能ある者達なんだろう？」

「！！」

「・・・知ってるんですか、俺達の存在を」

いくら攻略組でもやっぱり隠しきれるものじゃないのか。

『天才』とは言わずとも、天賦の才能がある人間が存在することくらいは気づいてる。

・・・だとしたら、だ。

こいつらのような、ただレベルが高いだけの一般的な人間は俺達をどう思う？

前の街では、確かめた訳ではないがおそらくは恐れられたり、その才能を疎んだりしているだろう。

なら、こいつらは？

レベルは高く、見た感じ、誇りのようなものもある風に見える。

となると、攻略組トップや一般の人間のように才能あるものを消そうとするのか。

それとも、誇りある武人として俺達に敬意までは見せなくとも見逃すくらいはしてくれるのか・・・。

どっちだ・・・？

「まぁ、な。上の方は必死に隠そうとしているようだが。そのくらいの情報は入ってくるさ。巧妙にカモフラージュされてはいるが、察することくらいはできる」

「そうですか・・・で、どうする気なんです？　俺達としては、今日あったことを全て忘れたことにでもしてくれるとありがたいんですが」

「我々も仕事でね。そんなことを言われてすぐ『はいそうですか』というわけにもいかないな」

「・・・ふぅん」

「さ・・サクヤ・・・」

「大丈夫、なんとかなりそうだ」

俺はミナに笑いかけておく。

多少は安心したらしい。

表情もほんの少しだけ和らいだ。

「・・・条件は」

「なに、簡単なこと。私には才能がなかった。だから努力、といえば安っぽいが本当にそれだけでここまで上り詰めた。だから・・・私の『努力』という力が真の才能にどこまでくらいつけるのか・・・。それを知りたいのだ」

「そうですか。そういうの、嫌いじゃない。でも、断言します。あなたは必ず後悔する」

「ふん、もともと才能ある者達が想像を絶する程強いということく

らい聞いている。仮に負けたところで何も思わんさ」

「『仮に負けたところで』・・・それがすでに答えですよ。あなたは諦めていない。才能ある者に、努力が打ち勝つ可能性を」

「それがどうした？　というよりも貴様らが才能ある者だという証拠もなにもない。そんなことを言って、私が怖気づくとでも？　・・・やるのか、やらないのか」

声が急に低くなる。

・・・仕方ないな。

でもこっちとしては願ってもいない展開。

やるに決まってる。

俺も纏う空気の雰囲気を変えてみる。

相手は敏感に感じとれたらしい。

「方法は、剣も魔法もなんでもあり。殺さないこと。条件はこれだけだ。いいか？」

「いいですよ。・・・それと、これだけは覚えていてください。才

能だけあったところでこの世界ではなんの意味も持たない。あなたもそれは知ってるはず。なのに俺達は強い。それは、才能にみあうだけの努力を怠っていないから。そして、あなた達が一生見ることのない程の地獄、一生感じることがない程の孤独を知ってる。たかがその程度の努力なんかでそれを覆せるなどとは、死んでも思わないで下さい」

「・・・・・口でならなんとでも言える。行動で示して見せろ。・・・ではそろそろ始めよう。私の名はアイザ。小僧、いや、才能ある者よ。名はなんという」

「・・・サクヤ」

「そうか・・・その名、しっかりと胸に刻みつけておこう」

「いや名前とか顔は忘れてほしいんですが」

「いくぞ!!!」

アイザが剣を抜いたので、俺も出す。

ヴン!!

と、どこからともなく『現れた』のは、白銀色に光る、刃がない

ように見える長方形の刀身を持つ剣。

この剣はほとんど使ったことがない。が、恐ろしいほど手に馴染む。

戦線を離脱する少し前に手に入れた。

まぁ細かいことはいいか。

そして俺はアイザへと向かった。

瞬間、二本の剣が火花を散らしながらぶつかり合う。

## 攻略組ＶＳサクヤ（後書き）

う～

ちょっとどうかな・・・

意見待ってます・・・

## 決着、そして反則（前書き）

うーん
戦闘描写も難しい・・・
次からはより気をつけます！
文章の書き方、表現に！
次からですいませんm（＜　＞）m

## 決着、そして反則

剣と剣がぶつかり合う音だけが響いている。

サクヤはずっと防御、アイザの剣を受けては返すことだけを繰り返していた。

おそらく、アイザの力量を測っているのだろう。

振り下ろされようが振り上げられようがすべて完璧なタイミングで弾いてみせた。

アイザは、突いてみたり横なぎにしてみたりもするが、まるで効果はない。

「くっ・・・サクヤ！　私をなめてるのか！！」

「なめてなんかいませんよ」

そしてふいにサクヤが白銀に光る剣を突きだした。

「う、ぁ」

なんとか身体をのけぞらせて回避するものの、追撃をかわせない。

突いたあと、みごとに手首を返して横に振りぬきアイザの胴を浅く切る。

アイザもそれなりに高価な鎧を着ていたはずだが、最早サクヤの技術と剣の性能の前には紙きれほどの効果も発揮しない。

重いだけ無駄だろう。音もたてずに裂けた。

なんとかバックステップで距離を置く。

「んな！？」

「そろそろ終わりますよ？」

サクヤが一気に間合いをつめる。

一瞬で１０メートル近くあった間が０になった。

だがアイザも反抗し、目の前で剣を振り回した。

一瞬顔をしかめたサクヤだが、すぐに攻撃方法をかえ、剣の行方を見極めながら右足のハイキックをアイザの胸を陥没させるほどの勢いで炸裂させる。

「がッ・・・！」

２０メートルほど吹き飛んだ。

サクヤはその様を黙って見つめ、ただ立つ。

数秒後、アイザが土ぼこりの中から姿を現す。

しかしいまだその目からは闘志が消えていない。

そして何か呪文を唱えている。

「あれは・・・バフか」

バフとは、強化魔法のことを指す。

身体能力や属性防御力を増加させたりとパーティでの戦闘ではサポートとしてまず不可欠な要因だ。

「まぁ感じからすると・・・肉体、身体能力強化か。にしても自分で自分を強化できるとは、戦士かなんかのくせに魔法関連のスキルも上げてたな」

わざわざ発動させる気はなかったので、目にも留まらぬ速さで突っ込んだ。

すると魔法発動の気配がした。

バフではない、これは・・・炎。

「炎よ！！」

魔法陣から莫大な炎が飛来する。

じつはかなり強力な魔法のはずだが、

サクヤはけだるそうに片手で、まるでハエを追い払うかのような仕草で消滅させる。

アイザは驚愕に目を見開き、口を完全に開け切って硬直していた。

「あ、あ」

「いかなる理由があろうとも、『とある理由』で俺には絶対に炎で

害はなせません。実際どんな属性でも無駄ですが、特に炎に関しては特別無意味です」

数秒して硬直から開放されると、途端にわめく。

「そ、そんな馬鹿な話があるか！！」

「あるんです。そして・・・才能とはもっともっと理不尽なものなんです。こんな程度、才能のうちに入りません。これをみたら、たかが一端に過ぎませんが、それがわかります」

サクヤがおもむろに片手を空へ掲げた。

すると、先ほどまで快晴だった空が急速に黒につつまれていく。

「堕ちてこい」

そう言った途端、空から数えることなど到底不可能な数の黒い柱状の何かが超高速で降り注いできた。

「ッ！！！！！」

一瞬で、あたりは闇一色になる。

その柱は、的確にミナ、ティナ、攻略組の人間、そしてアイザ、もちろんサクヤ自身をも全てをよけて半径1キロほどに突き刺さる。

アイザや攻略組の面々はすでにリアクションさえとれず、思考停止状態に陥った。

ミナでさえ、驚愕と恐怖を隠せない。

ティナは何を思ってか、静かに空を見上げていた。

真っ黒に彩られた背景から、白銀の剣を携え、サクヤが姿を現す。

サクヤの服は黒く、本来ならこの状況では物理的にも精神的にもその姿を見ることはできないだろうが、しかしその右手に収まる白銀の剣の存在のおかげで、うすく輝くサクヤを、全員が直視することが出来た。

しかし、人々の気が抜けようとしたその瞬間サクヤの姿は消失した。

一瞬後に再び姿を見せたサクヤは、アイザの首に左手を突き出す。

首に触れるか、というところで静止していたのは銀色に輝く剣ではなく、先ほど降り注いだ闇の柱だった。

右手に白銀の剣、左手に漆黒の闇の剣を持つサクヤの姿は、死を運ぶ死神のようにも見え、また、命を救う・・・いうなれば救済者のようにも見えた。

「終わりですね」

「・・・・・・・・・」

「言ったはずです。あなたは必ず後悔する、と」

「・・・才能ある者ってのは、皆こんなにもめちゃくちゃ、なのか？」

「ええ。だからもうつまらないことはやめろと、上にも言っといてもらえませんか」

これはサクヤの嘘だ。

ここまでの規模のものは、サクヤが今知る限りではミナぐらいしか発動できないだろう。

アイザは何も答えない。

「・・・では、もう行きます」

サクヤは、目的地へと向かい、再び歩き出した。

慌ててミナ達もあとを追う。

・・・・・やっぱりな。

サクヤがこんなにも早くこの場を去ったのは。

アイザや、他の攻略組の人間達の目を見て、この人間達が何を思い、何を言おうとしているのか。

それら全てを理解してしまったためである。

# 決着、そして反則（後書き）

**ミナ。おまけでサクヤ。（前書き）**

少し、内容を濃くしようと頑張ったんですがー
長くなっただけかもしれません・・・

**ミナ。おまけでサクヤ。**

俺達は、静かに風が流れる森のようなダンジョンを歩く。

雰囲気こそ良くはないが、周りの環境はすばらしくいいと俺は思う。

俺の魔法の痕もすでに通り過ぎ、一応歩みは次の街、「Ｄｅｎｉａｌ（否定する街）」へと向かっている。

「サクヤ」

「なに？」

「もうすこし、ゆっくり歩こう？　別に急ぎの旅ってわけじゃないでしょ？」

「ん」

まったく気づかなかった。

無意識のうちに、いつのまにか早歩きになっていたらしい。

いや、無意識ではないだろう、多分。

ずっと、あいつらの顔が頭から離れない。

あの姿、表情。

そして最も正直に感情をあらわしていた、俺を見る目。

一刻もはやくあの人間達から離れたいと、本能が叫んでる。

まぁその本能とやらも、ただの醜い自己防衛本能だろう。

もういっそ、攻略組のことなんて気にせず黙ってずっとミナと二人きりでこの世界の奥深くに潜っていればいいのか。

だがそうする場合、俺の心情なんかよりも余程重大な問題がある。

端的に言うと、ミナのことだ。

女の子にそんな生活をさせるのはどうかと思う。

ミナはただレベルが高いということ以外は普通の女の子、だと思

うし、二人で攻略するといっても、その過程でミナにとって精神的に辛いことなんかいくらでもあるから。

それでもミナのためにも万が一何かあったらいつでもすぐ日常に戻ることが出来るようにはしていたい。

まとめるとこうだ。

奥にずっといれば、攻略組の連中に会うことはほぼ確実になくなりミナの退路は確保出来るが、精神的問題がある。

逆に、当初の計画通り（といっても、ただ漠然と、そう旅を続けるものだとひとりで考えていただけ）攻略組の手が届かない『外側』と、統治範囲の中である『内側』の行ったり来たりを繰り返す場合、気持ち的には余裕が出来るだろうが、いつか攻略組に発見される可能性がある。

いくら警戒するとはいえ、これから先ずっと二人で旅を続けていく長い時間の中で、その可能性は決して馬鹿に出来ない。

一度見つかってしまえば、今回のようにはいかないだろう。

全世界で、俺達は『モンスター』として指名手配的扱いになる。

そういった扱いを受ける『天才』達は何人かいる。

そしてそうなってしまった場合、ミナと俺はもうずっと戦いの中で生きていくしかなくなる。

ミナの精神的ケアと、ミナがいつでも日常に戻れる状況の確保。

旅を始めてまだ何日も経ってないのに、かなり大きな決断を迫られているとみていいだろう。

でもこの問題は俺一人で解決出来るようなことじゃない。

なによりミナの意見が必要な訳だが、どう聞けばいいのだろう。

なぜか、話しづらい雰囲気になってるような気がする。

と思っていると、ミナから話しかけてきてくれた。

「サクヤのさ、さっきあのおじさんと戦ったときに使った魔法、あれは・・・っていうか、サクヤって魔法つかえたんだね」

「そりゃ使えるだろ。レベル上がれば魔力だって自動的に上がるからな、その関連を意識して高めようとしなくても。それに俺は、魔法関連のレベルは自分でも意識して上げてる。主に攻撃系統だけど」

「それにしたって、あれは強すぎたよ。しかも本気じゃなかったように見えた。なんかさ、うやむやになって聞けなかったけど、サクヤのレベルを私は知らない。君は確か、ターゲットのレベルを『見る』ことが出来るスキルを持ってるって昨日話してくれたよね。だからもうわかってるはず、私のレベルは。なら、君はどうなの？」

「・・・ミナと同じくらいだけど？」

「嘘。私は完全に魔法関連だけを上げてる。だからあまり育ててない攻撃系統の魔法でも、同レベル級のバランス型の人に劣ったりはしない。いくら君が攻撃系統の魔法と、近距離戦闘のスキルだけを上げてるバランス型だとしてもここまでの差はつかないはず。魔法全体を底上げしてる私と同じくらい、それどころか劣っていたっておかしくないのに・・・」

「・・・」

いや別にいまさら隠すようなことじゃない、ましてや嘘をつく必要だって全くない訳だが。

やっぱり、自分のレベルを誰かに明かすのはちょっと、なんというか・・・嫌だ。

ミナには悪いが、教える必要がない限り正直に明かすつもりはなかった。

これをミナが知ったら激怒するだろうな。

仮にもこれからずっと命を預けあう仲間だというのに実力を明かさないなんてマナー違反、とかそういうこと以前に、場合によっては、そのせいでなにか取り返しのつかないことが起きるかもしれないというのに。

まぁそれでもここは自分のわがままを通すことにした。

「うん、言いたくないなら、それでも、いいけど。こんな話、結構どうでもいいし。だってサクヤがどんな魔法使おうとどれだけ強かろうと絶対いつかは教えてくれるはずだもんね！」

「まぁ。ずっと秘密、って訳にはいかないだろうな」

「先は長いもん。ずっと二人で生きてくんだよ？　もしかしたら仲間増えたりもしてさ」

ずっと。　二人で。

それは、どうやって？

「今この話をしたのに深い意味はないよ。ただ、勢いが欲しかっただけ。多分、こればっかりは避けて通れないだろうから。・・・決めなきゃいけないことがあるんでしょう？　サクヤは今、何を悩んでるの？」

「いや、何を、って」

「どうせなんか気をつかってるんでしょ。君の表情、分かりやすい

と思うよ。少しなら君のことが分かるようになってきたかな。それで、何を悩んでるの、何を決めかねてるの」

「それは、その、これからのこと、とか」

「さっきのことが関係してるの？」

さっきのこと、とは多分俺とアイザの戦いのことだろう。

関係があるといえばある、がそれはただきっかけにすぎないと思う。

俺のことは置いといて、今ここで大事なのはミナのことだ。

「いや、さっきの戦闘は関係ない」

「帰り際に見たあの『視線』も？」

「・・・ああ」

「だったらやっぱり、私のことだよね？　自惚れてるわけじゃないけど、サクヤのことだから、そんなに真剣に悩んでるのはきっと私のことなんだろうなって思ってた」

「ずいぶん分かりやすいんだな、俺。一応こっそり考えてたつもりだったんだけど・・・。」

「あはは、気にしなくていいよ。君のことは、あの街にいた時からずっと見てたから。多少の違和感ぐらいになら気づける自信があります！」

「へぇ、・・・え？」

「それで！　なんの話？　くだらないことだったら怒るよ？」

「あ、うん、まぁ俺的にはかなり大事なことだから。・・・じゃあミナに聞くけどさ。これからのことなんだけど」

「うん」

「後のことを考えるとさ、これからの旅は、ずっと世界の端っこのほうを攻略し続けたほうがいいんだ。内側には二度と戻らないって程に、ずっと。それこそ、死ぬまでってことになるかもしれない」

「そうなんだ。ところで、そう考えた理由は何？」

「攻略組のやつらに見つかるリスクを減らすため、かな」

「そう。じゃあ、見つかってはいけない理由は何？」

「全世界を敵に回すのを防ぐ、ため」

「なら全世界を敵に回してはいけない理由は何？　どうせずっと『外側』にいるんでしょ？　ならいくら世界を敵に回そうと同じじゃない」

「・・・ミナ・・・」

「それで、全世界を敵に回してはいけない理由はなんなのよ」

「・・・」

「くだらないことだったら怒るよって言ったよね？　答えて。なぜ、敵に回してはいけないのか」

「それ、は、・・・ミナが、戻れなくなるから。日常に。ずっと戦

い続ける日々を過ごしていたら、精神が崩壊することだってあり得るんだ。もしそうなったとき、戻る場所がなかったらどうなる。そのままモンスターに殺されるしかないんだぞ？　そんなのは俺が耐えられない。だから、」

「ああ、もういいわ。それで一応聞くけど、他の方法も考えてた訳？」

「おま・・・まぁ、一応」

いきなり睨まれたので、仕方なく話を変える。

「『内側』にくるたびに、攻略組の気配を毎回警戒する。絶対に鉢合わせないようにして、『外側』と『内側』を往復しながら攻略を進める」

「なるほどね。そうすれば、攻略スピードが落ちる代わりに、気分も閉鎖的にならなくて済む、と。はぁ、くっだらない。やっぱりくだらないよ、サクヤ」

「おま、えなぁ、人が必死に考えてたことを一瞬で全否定とか、遠慮ってもんがないのな」

「だってくだらないもん。ほんと馬鹿なんだね、君は。・・・それで？　君は私の答えを待ってるの？」

「こんなぼろくそに言われたら答えなんて分かりきってるけどな」

本当に容赦なく俺の考えを切り捨ててくれた。

こんな真剣に考えてたのが馬鹿らしくなるほどに、清清しく。

なんだかな。

「ならいい。一応言っとくけど、私が選ぶのは前者。要するに、ずっと、それこそ死ぬまで、だっけ？　どうでもよかったからなんかうろ覚えだわ。とにかく、私は戦い続けるよ。たとえ、全世界を敵に回しても」

「・・・一応聞くけど、なんで？」

「そんなのも分からないの？　本格的に、君、馬鹿なの？」

こうも真顔で馬鹿だといわれた男はそうそういないと思う。

「もういいよ！　馬鹿で！　それで、なんでなんだよ！？」

完全にキャラが崩壊し始めている。

もう修正不可能なんじゃないだろうか。

「・・・君がいるから、に決まってるでしょ」

「・・・え？」

「君がいるから！　っていうか、サクヤこそなんなのよ！　なんで君は私を攻略パートナーに選んだの！？」

なんで？

なんでなんだろう。

たまたまミナと出会って、たまたまミナが強くて？

それだけで俺はミナを誘ったんだろうか。

「なんで、だろうな。分からないけど、レベルが高くないと仲間にはなれないし、ミナのレベルが桁外れに高かったから、ってのも理由の一つだとは思う」

「うー、聞き方が悪かったのかな・・・。じゃぁ、レベルが私と同じくらい高い人とだったら誰とでもこういう仲間になってたの！？」

「ああそういうことか。うん、なんでだろな、不思議とそうは思わない。んー、なんていえばいいんだろ」

「私もうまく言えないけど、多分そういうことなの！」

「んー？　そうなのか？」

「そうなの！　ってかもういい！　それよりさ、私になんか言うことないの！？」

「言うこと？・・・ああ、そうか。・・・えっと、そのー、・・・くだらないことでだらだら悩んでミナを怒らせちゃって、ごめん」

「ん。よくできました。えと、サクヤはさ、もし私が世界を敵に回しても、味方でいてくれるのかな？」

それこそくだらない質問じゃないか？

「さぁな。とか冷たく言っとこうかと思ったけど、今日は俺が悪かったみたいだからそういうわけにもいかないか。・・・もちろん。当たり前だろ？　そのための『仲間』なんだからさ」

なぜかミナは満面の笑みを浮かべる。

別に当たり前のことじゃないのか？

なんでそこまで喜ぶんだ。

・・・まぁこいつの笑った顔、すさまじく可愛いしな。

思う存分見ておこう。

「じゃ、早く行こう！　歩いて行くにはそんな近くないんだからさ。っていうか、もう走っちゃうよ！」

「うわっ！！」

ミナは俺の手を引いて走る。

森の雰囲気は、この上なく楽しげだ。

テンションが上がってきた俺達は、全力で森を駆け抜けた。

なぜかどのモンスターも、追っては来なかった。

**海にて。（前書き）**

分かりづらいかもしれません。

## 海にて。

海が、綺麗だ。

ゴミや汚れなんてものはいっさい無い。皆無だ。

なぜかは分からないが、強い力のようなものを感じる。

おそらく、この海それ自体がかなり強い自然浄化力を持ってるんだろうな、と思う。

それに加え、無粋な人間や生き物もいないんだろう。

エメラルドグリーンよりも少し青く、潜ったら地上と同じくらい遠くを見通せるほど澄んでいる。

今俺達は、そんな海に沿って広い砂浜を歩いている。

ただひたすら。

といっても、二人で楽しく会話しながら歩いているため、苦でもなければあまり飽きもしていない。

最初は、海を眺め、仲良く歩き続けるという状況に少し、なんというか二人して照れてたりした。

そして照れ隠し気味に必死に喋り続けていたミナを、俺は比較的落ち着いてたから微笑ましく見ていれたが、いつのまにか無理をしている感じがなくなっていて、すでに自然体で絶えず会話が出来ていることに俺は逆に余計照れてきた。

もちろん、表には出さないが。

誰かと、嫌なことを何も考えずただ会話するというごく当たり前のことが、こんなにも楽しいことだったんだということに初めて気づいたような気がする。

さらに、その『誰か』が『ミナ』だから、ここまで楽しいんだと自分でも自覚してしまっていた。

そんなことを考える自分にさらに照れて、話も途切れたから自分の世界に入り込む。

つい数日前のことを思い出してみた。

半日間森を駆け抜けた。

疲れなんて感じない。

それほど俺達の気分は高揚していた。

すると突如視界いっぱいに大量の水が広がった。

そのときミナは感嘆の声をあげ、俺も素直に驚いた。

一瞬湖かと思ったがどんなに目を凝らしても果てが見えず、水平線が、前と左方向に見える。

なら右方向はというと、砂浜があった。

それも何キロどころじゃないだろう、針のように、砂浜の道が伸びていた。

かろうじて地平線が見える。

どういうことかというと、砂浜の幅はだいたい２０メートルくらいでそこからさらに右には今までと同じく森がある。

森と大量の水に砂浜の道が挟まれているような状況。

俺の目は神懸かって良いため、地平線や水平線が見えるということは、少なくとも十数キロはある。

この世界は、今攻略済みなところは完全に水平だ。

だから、障害物さえなければ、世界の端から逆の端も見ることが出来る。

今俺がいる場所はかなり『外側』だが、ここから、正反対の場所にある『外側』、つまり、この円状に攻略されている世界の『中心』を通る直径の距離ほど離れている場所も、見ることは不可能ではない。

それは、見る人間の視力に依存する。

普通は4～5キロ先しか見えない。

それ以上奥は、ぼやけて見えるだろう。

俺はレベルが高く身体能力が高いため、その数倍くらいは見える。

まぁそんなことはどうでもいいが、ようするにこの馬鹿でかさは、『海』だということだ。

「おっ・・・きいねー！　すごい！　終わりが見えないよ！？　こんな湖、『外側』でも見たことない！」

「これは多分湖じゃない、海だな」

「え？　海？」

「そ。世界と同じくらい果てが見えない。攻略組も、ここからほとんど正反対のほうの最前線で、結構最近になって発見したそうだ」

「うん、聞いたことはあるけど。じ、じゃあこの海とその反対側の海はつながってるの！？」

「多分だけどな。ってか、つながってるくらい大きいから湖とは別に海って名前をつけたんだろ」

「たしか、仮定したんだよね。『海は世界と同義』って。どんなに頑張って先に進んでも終わりが見えなくて、ついに手に負えないくらい強い高レベルモンスターが出て来始めたから、捜査を断念。あまりの大きさに違和感を持った頭の良さげな人が、仮説を立てた。『これは湖ではなく、この世界そのものだ。我々が立っているこの全ての大地は、世界という水の上にある。いままで、そしてこれから先発見される大地は、全て一つの「島」に過ぎない。』と」

「そう、そして世界とは別に名前をつけた。それが『海』」

「見たことはなかったけど、これが、海か～。大きいね」

「それしか言えないのかミナは」

「だ、だってホントにおっ・・・で、でかい？　から・・・」

「いや無理して言わなくても・・・てか、他にも言い方あったんじゃないか？」

「う、うるさい！　っていうか、サクヤも初めてみたの？」

「ああ。こっちの方には初めて来たから。［Ｄｅｎｉａｌ（否定する街）］には何度か行ったことあるけど転移だし、初めて行った時も違う方向からで、そっちに海はなかったな。もっとも、仮定が事実だとするなら、ただむき出しにはなってなかっただけ、ってことになるけど」

「へ～、そうなんだ」

・・・という話を、３日前にしていた。

海について話していただけだが、ともかくあれから3日経ち、二人はずっと変わらず砂の道を歩き続けていた。

モンスターも出て来なく、まるでサクヤとミナがより親密になるためだけにここにいるようにも思える。

経験値をためられないのなら歩いていく理由はないのだが、二人

はそんなことにも気づいていない。
歩きながら話を続けている。
「サクヤ～」
「ん？」
「海が綺麗だよ～」
「それもう聞き飽きたな・・・」
「もう。なんか気の利いたこと言えないの？」
「んなこと言われても」
「は～駄目だね、君は」
「いきなり駄目だとか言わないでくれませんかねー」
「女心がわかんない男って、男としてだめだと思わない？　そして

男が男として駄目だってことはもうすでに人間として駄目だと思うの」

「・・・」

「まぁサクヤはそういう人だからね。サクヤが『喫茶店』に来る度に、君の鈍さにはイライラしてたんだよ～」

「俺が鈍い？　そんな訳ない。学校にいたころだって、俺になんらかの感情を抱いてる奴にはすごい敏感だった。悪意も好意も。主に男からは嫉妬が激しかったなぁ。俺って意外にモテたからさ」

「・・・別に、意外でもなんでもないと思うけど」

「ん？　なんか言った？」

「何も」

「？　まぁとにかく、女の子からの好意にも敏感で、ってか分かりやすすぎるんだよ。でも告白を断るのはなんか苦手だから、される前にさりげなーく目の前で、俺、好きな人いるんだよなーみたいなこと言ってみたり大変だった。それで、」

「そんなに敏感ならもう気づいてるのかなあ？」

「・・・何が？」

話を途中でいきなり遮られ、サクヤは少し不機嫌になっているが、ミナは気にせず言う。

「気づいてないんだね・・・」

「だから何に？」

「なんでもない。はあ、前途多難、なのかな・・・」

「一人で何言ってるんだ？」

「なんでもないって！」

サクヤがミナに対して鈍くなっているのは、ミナが、サクヤが街にいたころからずっとサクヤにとってその他大勢の女の子ではなく、唯一特別な感情を抱いている女の子だからなのだが、流石にミナもサクヤも、そこまでは分からない。

ここで、ミナがあることに気づく。

「・・・っていうか、ここら辺モンスター出ないよね？　なら、歩く必要あったの？」

「んー？　、、、あ」

「・・・」

「わ、悪い」

「この3日間、全くの無意味だったね？　まぁ、楽しかった、からいいけど。それで、ここから街まではあとどれくらい？」

「もう二日くらい歩けばつくと思う」

「そ。どうせだから、歩いて行こうか。転移して行きたい？」

「いや、風も気持ちいいし、歩いて行こう」

あの森でアイザに出会うまで、約5日ほど戦いながら進んでいた。

だがそれからはモンスターとの戦闘はなかった。

そのため、経験値を稼ぐ、という目的はほとんど達成出来なかった訳だが、二人はまるで気にしていない様子。

もともとレベルは高いからか、いちいち気にしても仕方が無いとでも思ったのだろう。

二人は徒歩で街へ向かう。

砂浜を抜けた途端、結構な回数モンスターの襲撃があったが全て瞬殺した。

そしてきっかり2日後、二人は［Ｄｅｎｉａｌ（否定する街）］に到着する。

## 天才の街（前書き）

前半が特にめちゃくちゃかもしれません。
あと、街の詳しい設定は、次話で書いちゃいます。
この文に入れるの難しすぎました。
根気強く読んで頂けると嬉しいです・・・

## 天才の街

街に着いた。

なかなか活気に溢れている、と思う。

世界で公には未確認の素材や、それらから作られた武具がこの街だけに出回っていて、『天才』の他にもこの街の許可を得た極一部の一般人が、攻略組には秘密裏にここでそういったものを購入したりもしている。

だから、人の出入りは激しい。

一応9割以上は『天才』だが、実質、表向きこの街は『否定する街』と言われているが、本来は一般人とも友好な関係を保っていた。

もっとも『天才』達の様々な審査をクリアしなければ一般人がこの街に入ることは出来ないが。

そして、俺が過去に来たときと比べると、格段に発展している。

面積もだが、特に人口が。

ここはまだ入り口なのに、視界には1万人近く人間がいる。

この街への入り口は１０個以上あるはずだし、この入り口にだけ人が集中することはないはず。

これは、多すぎじゃないか。

このまま中心部に近づいていけばしだいに人は増えていくし、面積とあわせて計算すると、少なくとも５００万人はいることになる、と思う。

・・・今までもそうであったように、おそらくこれからも攻略が進み、レベルも上がって、それにともない街もどんどん大きくなっていくはずだが、『天才』が徐々に強くなり、攻略も進み、それで街自体が大きくなるなら分かる。

というよりそれが普通だろう。

だが『天才』達を含めた世界全人口の中で『天才』達の人口割合自体が増加するほどに、しかも急激に増えてきているのはどういうことだ？

強くもなっていくが、それと不釣合いなほど数も増えていく。

これは、はっきり言っておかしい。

『天才』か一般人かは、理不尽とは思うが生まれた瞬間に決まる。

その時どれだけ才能があるか。

ここで才能がなかったらレベルの伸び方は普通だし、才能があったら、レベル上げの効率が高いため、あっという間に上がっていく。

そしてその割合は、俺が知る限りほぼ一定だった。

どうやって割合を出すかというと、天才の街にいる『天才』の数と、攻略組が公表している全世界に存在する全人類の数を比べる。

１：５００

それがだいたいの割合だ。

ずっと変わらなかった。

だが、今は明らかに１：１００程になっている。

そしてこの事はかなり大きな問題とみていい。

攻略組に所属している者に『天才』はいないはずだから最高レベルは、１６７。

この１年で多少上がったとしても１７０レベルいくかどうか。

そして平均は４０～５０Ｌｖ。

対してこの街にいる『天才』達の最高レベルは４００後半…仮に４５０Ｌｖだとして、俺が何度かここに世話になっていたころの『天才』平均は約３２０Ｌｖ。

どちらの平均も、今は上がってるか下がってるかは分からない。

が、どうあれ戦力的には確実に『天才』が圧倒的に勝(まさ)っている。

平均して３００Ｌｖ近い差があり、レベル差と人口差に比例の関係はないためにたとえ人口では何百倍も勝っていようが、レベルが６分の１程しかないならまったく話にならない。

今までの１：１００程でようやく戦いになるくらいだったんだから。

この状態。

もし『天才』達が全員でクーデターなどを起こしたら、まず成功する。

１００％だ。断言出来る。

まぁいくら世界の一部から敵視されてるとは言え、ただそれだけの理由ではどんなに条件が揃おうと『天才』達はそんなことはしないだろう。

人間、それも攻略組トップだけならまだしも、ただの一般人も巻き込んでの戦いは、ほぼ誰も望んでいない。

だが、今現在のこの街の状況、要するにここまで縮んでしまったこの人口差。

それを攻略組が知ったら、どんな行動に出るのか。

・・・最も可能性が高いのは、あの『天才』狩り。

ここ数年、というよりあの一件以降同様のことは起こっていない。

おそらく攻略組も、これ以上何かあれば『天才』達はもう看過するつもりはないということを雰囲気か何かで察したのだろう。

とりあえずはあの一回、『天才』の1人を狩れたことに満足していたらしいが、この差は攻略組にとってはかなりの脅威だと思う。

それこそ、自分達の被害さえかえりみず『天才』を根絶やしにしようとしても全くおかしくない程に。

そして、差をひっくり返す方法として今回またあの事件が大々的に起こってしまう可能性がある。

そのとき、『天才』達がそれに気づき、弱い一般人を殺すことを覚悟し、準備を終えて応戦し始める頃にはすでに戦力的に互角に、もしかしたら以下になっているかもしれない。

あくまで可能性、だが。

・・・流石に深読みしすぎたかもしれないな。

それでも、忠告しておくにこしたことはない。

というか、たかがぱっと見、街の人口に変化があったからってここまで考えるなんて。

ただの勘違いかもしれないのに。

でも今回のことが例え勘違いに終わったとしても、『天才』と『攻略組』の、大きな争いが、いずれある。

しかもそれは全世界を巻き込んだ大規模なもの、戦争になる。
そんな予感（予知とも言えるほどの自信がある）がする。
もしそうなったら、俺はどちらかについて戦うのだろうか。
分かんないけどまぁそんなことは『その時』が来たら考えるか。

「ふう」

とりあえずは街に入ろう。
人口がこんな不自然な程に増えた理由も全く分からないし。
もともと情報収集のつもりでも来た。
情報収集といっても、この街でこの街のことを聞いてまわるだけなんだけど。
そしていざ行こうとして歩きだそうとした瞬間に、ミナ達に気づく。
ミナもタイミングを見計らって話しかけてきた。
「やっと終わったの？　街に着いた途端に難しい顔でなんか考え始めてさ。何考えてたの？　別に隠すようなことじゃないんでしょ？」

「あ、ああごめん。・・・ちょっと。たいしたことないかもしんないんだけど」

「・・・それは、たいしたことがあるかもしれないってことだよね」

「もしかしたらな。とりあえず、歩きながら話そう」

そう言って、俺達は歩きだした。

入り口をくぐり、舗装された道を歩く。

周りには等間隔に木が植えられている。

しかも、この街の地面はなぜかすべて芝だ。

木もあり、いたるところに花まで植えられていて、いい匂いがするうえに空気が美味しく感じる。

建物は全て木製。

だが3階建てのものが基本で、４階建てや、たまに5階建てのものまである。

しかもどんな地震にさえびくともしないほどの耐久力も持ちあわせている。

そんな景色を見ながら、ミナが先に口を開いた。

「それにしても大きいしなにより人が多いね～！　『天才』ってこんな多かったっけ？　何度か『天才』に会ったことはあるけど、せーぜい１００万人程度って聞いたような。見た感じ街は凄く大きそうだし、この入り口だけでこんなにいたら、もっともっといると思わない？」

「俺も今ずっとそれを考えてた」

「え？　なんで？　なんか問題あるの？」

「んー簡単にいうとクーデター、かな」

「ああ・・・。でもこの街の人なら絶対そんなことしないと思うけど」

確かに、この街には騒がしい音が溢れている。

威勢のいい客寄せの声も聞こえるし、

何よりも笑い声が目立つ。

すれ違う人たちもみんな笑っていた。

「まぁそうだ。でも、人がさ、多すぎるんだ」

「やっぱり？　私も始めてここにきたけど、いままで聞いてた情報と違いすぎる気はした。けど、それがどんな脅威になるの？　良いことっていう風にはとれないの？」

「いや確かに良いことだと思う。だけどそればっかりじゃないんだよ。俺の単なる予想に過ぎないけど」

「ふぅん。じゃ悪いことってなに？」

俺は、思っていたことを全部ミナに話した。

「攻略組、か・・・。うん、その可能性はすごいあると思う。というか、私は確実にあると思うな。あんなに大きな組織がずっと気づかないなんてありえる？　いくらみんなが隠したってここまで大規模な街の中を隠し切るのは難しいよ」

「だよな。だとすると、どうするか。この街のトップに会いに行くか？　世界最強の人間。名前は忘れたな・・・会いにいけばわかるだろ。ま、レベルはミナの方が圧倒的に高いけどな」

「それを言うならサクヤも、でしょ」

ミナがちょっと睨んできた。

全然怖くないし、それでもシラを切る訳だけども。

「いや、同じくらいだから」

「まだ言うんだ、へー」

「・・・と、とりあえず行こう。いろいろ見てまわりたいならその後、どこでも付き合うから！」

「ほんと！？　言っとくけど私お金出さないから！　全部サクヤ持ちね！」

「お前も金ならいくらでもあるだろ・・・」

俺達はレベルが違うため、この街で買えないものは絶対にない。

比較的高価な武器でさえ、最上級のものを軽く１０００個ほどは

買えてしまう、完全にチート。

なぜか今俺が持ってる武器は無料だったくせに性能は良いし、買うとしたら俺の全財産でも買えない、これもチートな一品。

ミナは主に魔法しか使わないため、武器はそのときに合わせて魔力で作る。

なら何を買うんだという話だが、いろいろあるんだろう。

俺は何も買いたいものはないが、一応回復系のアイテムを見る。

ぶっちゃけ、この街で情報収集以外にすることはない。

まぁミナがどこか行きたいっていうなら付き合ってやる。

だからさっさと行ってさっさと終わらせよう。

そして中心部へ向かう。

普通に歩いていったら数日かかってしまいそうだが、この街の中ではある程度高速で走ってもなんらおかしくない。

途中で道を聞きながら行っても今日中にはつけると思う。

「じゃ走るぞ」

「ちゃっちゃと済ませて買い物行こう！　置いてくよサクヤ！！」

と言ってすでに走り出したミナを追う。

無邪気、というのか・・・。

あまりに可愛らしくて思わず笑ってしまった。

そしてミナはもう遥か遠く。

でも、すぐに追いつく。

## 捕捉です（前書き）

予定ではあと二人メインが出てきます。

この小説は、所謂ご都合主義です。

**捕捉です**

アース（この世界）

面積　拡大中　現時点で約４億ｋ？　（うち１億程が海）　＋約５５０００ｋ？

人口　約３１億人　＋　約１２００万人

同心円状に広がっている。

世界の中心に位置する場所は［Ａｎｃｉｅｎｔ　ｒｕｉｎｓ］

モンスターのレベルが桁違いに高いため、現代の人間は誰も入ったことがない。

モンスターはＨＰの概念があるが、それ以外の生物には無い。

が、ＭＰの概念は全ての生物にある。

モンスターを倒すことによって、生きていくための資金や素材を得られる。

人口も面積も、『果て』が発見されるまで増え続ける。

［Ｄｅｎｉａｌ］（否定する街）

面積　約５５０００ｋ？

人口　約１２００万人　（うち、１００万人程が一般人）

長方形を中心から少し丸く曲げた形をしている。

『天才』

生まれつき、絶大な才能を持って生まれてきた者。

『天才』に定義されるのは、レベルが上がりやすいこと。

だいたい、一般人の４～５倍の効率がある。

全く同じモンスターを倒しても、一般人の４～５倍の経験値が入る。

その他、剣術や魔法といった各方面の能力が上がりやすかったりする。

サクヤの場合、全てが高い。特に攻撃関連。

ミナは、魔法のみに特化。

サクヤ

Ｌｖ．１３７９

武器　片手直剣　銃

ミナ

Ｌｖ．９３５

武器　無し

## 捕捉です（後書き）

なにか大きな矛盾等があったら教えてください！

## 世界最強の男。でもサクヤ達には遠く及ばず。（前書き）

いつも以上に退屈だと思います。
話してばっかで。
次につなげるのと、軽く伏線入れる目的の話です。
出来れば最後まで見てください。
あと、ものすごく展開が急です。
分かりづらいと思いますが、すいません・・・

**世界最強の男。でもサクヤ達には遠く及ばず。**

「ひさしぶりだな、サクヤ」

「・・・・・・・・・・・・・」

「（小声で）サクヤ、サクヤ、　なんか知らないけどそこの無駄に偉そうで1メートルくらいの顎鬚が生えてて頭のてっぺんが寂しくてとにかくひとことで言うと変なおじさんが名前呼んでるよっ！返事、返事！」

「聞こえているが？　そこのお嬢さん。ぎりぎり聞こえるような小声で話されるとすごく腹立たしいな。そして偉そうとはなんだ偉そうとは！　事実、わしはこの街で最も偉いのだぞ、うぉっほん！」

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・サクヤ、サクヤ、なんか知らないけどそこの無駄に長いローブ着てて服とか全部白くて自分より大きい杖持ってて頭のてっぺんが寂しくてとにかく全体的に痛い感じのおじさんが名前呼んでるよ！！」

「全部聞こえているが、というか頭のてっぺん寂しいとか2回も言うでなぁい！！　貴様、小娘の分際で・・・！」

いい加減俺は叫ぶ。

「あー！！　お前らちょっと黙れ！！　今必死に思い出してんだろーが！！　全然集中出来ねーわ！！！！」

うるさい。

今こっちはあのおじさんが誰なのか思い出してる最中なのに。

でも、『天才』のリーダーってこんなおっさんだったか？

もっと年とってて無口で硬派な感じだったような・・・。

名前はありふれていたというか、あまり印象に残らなかったが。

でもこいつはこいつで見たことがあるような・・・。

・・・思い出せん。

「サクヤ・・・？　私は、少し馬鹿にしてたところもあったけど、ちゃんとさりげなくこのおじさんの外見描写をしてたし意味のあることだったよ？　でも君のは、ちょっと、なんというか・・・酷い」

「その台詞も十分酷いということには気づいてくれないのか！？　それよりもなんだその口の利き方は！？　礼儀がなっておらんぞ小娘！！」

「やっぱ分からん。そしてあんた、敬意を払うべきまともな大人には見えないな。敬語なんかつかってもらえると思うなよ」

「わ、わし・・・この街で一番偉いのに・・・」

なんか、ものすごくしょげていらっしゃる。

きもい。

「ということは、お前がトップか？　名前は？　端的に言え」

「いかにも！！　何を隠そう、わしがこの［Ｄｅｎｉａｌ］（否定する街）の最高責任者である、」

「いいからさっさと名乗れ」

「今名乗ろうとしておっただろう！？　トーレンスだ！！」

「ていうかお前、なんか見たことあるな。でも、俺が知ってるリーダーとは違う、よな？」

「くっ・・・わしは名前を覚えていたというのに・・・！　・・・うむ。お前の言い方でいうなら、わしは副リーダーの補佐だったというべきか」

「副リーダーの補佐？　なんだそれは」

「そのまんまだ。リーダーを補佐する者を補佐するのだ。というか本来はだな、リーダーなんて言い方はせん。最高責任者という」

「ああそう。で？　そんな地位だったのになんで今はいきなり最高責任者なんかやってるんだ？　この1年とすこしで出世したとしても、トップになるということはありえないだろう。あんたはもういい年してるし。トップが替わることは、そいつが老衰する、またはそれ以上の『天才』が現れた時くらいしか無いからな。あの人は多分、まだそんな衰えるような年齢じゃなかったし、『天才』の線も

薄い。何より、副責任者の補佐って結構下の位だろ？　それがどうして一足飛びで最高責任者まで？」

「そんな長々と説明しなくても・・・まあよい。端的に言うと、最高責任者、及びその補佐が死んだ。ただそれだけだ」

「な！」

トーレンスは随分唐突に、なおかつ不自然な程あっさりとストレートに問題発言をかました。

「し、死んだ！？　何で！？　その人達は世界で一番目と二番目に強いんでしょう！？」

あまりの急展開に、ついにミナが口をはさむ。

気持ちは分かる。

俺も全く意味不明だ。

「ミナの言うとおり、何があったんだ？」

「・・・それは分からない。ただある時、死体となっていた二人が

見つかったっていうだけの話だ。別にあなたにとっては全くの赤の他人、それも見たことも会ったこともないような人のことにそんな取り乱すことはないぞ、お嬢さん」

「・・・だって人の死よ？　あなた、上司が殺されたかもしれないのよ！？　どうしてそんな平然としていられるの！」

「ミナ。別におかしなことじゃない。こんな世界で、いちいち上司の生死に関心をもつような人間なんて稀だ。昨日まで楽しく話していたはずなのに次の日にはもういない、なんて珍しくもなんともないんだから。俺達の常識を当てはめちゃ駄目だ」

ミナは、人の死を見たことも近くで感じたことも少ないんだと思う。

おそらく自分が強かったから。

誰かとあまり長く付き合ったことがなく、そういう機会が少なかったんだろう。

それがいいことなのかどうなのかは俺にも分からない。

いざその状況に直面してしまい、それがモンスターなどによるものだった場合、経験があればあるほど迅速に行動にうつることが出来る、とか、人によって捉え方は違うだろう。

でもやっぱり俺は良いこととは思いたくはない。

経験はあったほうがいいけど、それは決して良いことじゃないと思う。

特にミナのような女の子には余計難しい。

まあどちらにせよ、ミナにはこれからもそんなことは絶対に経験させるつもりはないが。

「でも・・・！！　そんなの、寂しいよ。たとえ悲しんだりしたところでなんの意味もないことくらいわかってる。ただの自己満足なのかもしれないけど・・・」

「そうだな。確かに意味はないし、自己満足かもしれない。でも俺はそれが間違ってるとは絶対に思わない。っていうか身近な人の死になんとも思わないやつなんか、くそだと思う。でもミナ、この人はそういう訳じゃないらしいぞ？」

トーレンスは随分あっさりしてるように見えるが、本心ではそうじゃない。

何か、覚悟のようなものがあるように思える。

・・・このまま黙っている訳じゃないみたいだ。

「なにか、心あたりでも？　そもそも、その二人の死はモンスター

や事故によるものじゃないのか？」

「・・・心あたりはまるでない。だがおそらくは、人間による殺人だ。確実ではないが」

「その根拠は」

「二人についていた傷跡。刀、または剣によるものと思われるものが多数。それに魔法の残滓、それも消えかけにも関わらずかなりの密度をもつ程のものが少し感じられた。剣を扱い、魔法も扱う。そんな存在は、わしには人間くらいしか思いつかん」

「まあ確かにそうだな」

そんなモンスターくらい他にいくらでもいるが、この人が知る由もないほどの高レベル地帯の話だ。

だが、そういったモンスターの可能性も普通にある。

なんせ実質世界最強の二人を殺しえたんだから。

「だがおかしいところが二つある。一つ目は、なぜ死体を発見されるようなミスを犯したのか」

「じゃあまずは犯人が人間だと仮定する。俺に思いつくのは、1、実力だけはあったが、頭は悪い集団。2、ばれても問題ないほど実力に自信があるか。3、これが俺は怪しいと思ってるが、・・・挑戦状の一種の可能性だ」

「うむ・・・ならばあえて理由は聞かん。結局はどうせ高レベルの実力者なんだからな。これは別におかしいというだけで特に重要なことではない。もっとも、サクヤの言う、挑戦状の類のものだった場合は別だが。わしもそこまでは考えておらんかったぞ？」

「そりゃどうも。言っとくが、ただの勘だ。・・・で、二つ目は？」

「二つ目は、おかしいことというよりも、単純な疑問だ。それは、誰もがまず最初に思いつくことだと思うが？」

「要するに、『動機』でしょ？」

やっぱりミナでも分かったみたいだ。

でもこれは、相当重要で、難しい問題だと思う。

いや、この場合はある程度簡単かもしれない。

「そうだ。なぜ二人を殺したか。それが全く分からんのだ。通り魔的殺人の線は薄いだろう、そんな者に殺されるなんてあり得ん。だとすると、何か目的があって『天才』最強の二人を狙った、と見るのが普通なんだが、この二人の地位どころか存在さえ知ってる者はこの街にしかおらん。ならばこの街の住人か、というとそうではない。だとすると・・・」

「ちょっと待て。なぜこの街の住人じゃないと言い切れる？」

「む・・・わしは、魔力を五感で感じることが出来る。色、匂い、音、感触、味。他人でも、そのどれかが似てる魔力を持つ者同士はいるが、全てが同じ、どころか、全て似ていたということさえいまだかつて無い。それに、わしは一度調べた魔力は絶対に忘れん。あの二人から感じた魔力、あんなものは見たことも聞いたことも感じたことも聞いたことも味わったこともない。だから、この街の人間ではないのだ」

「へえ。便利な能力だな」

「そうだろう、そうだろう。ならばそろそろ敬語を・・・」

「いきなりどうした。真面目な雰囲気はどこいったんだ？」

「・・・とにかく、なぜあの二人を殺す必要があったのか、それが

分からんのだよ」

まあ、普通なら分からないか。

だが俺はさっき気になったことがある。

これも、もしかしたら攻略組が関係しているのかもしれない。

でももしそうなら、『天才』最強の二人を倒せる程の力が、攻略組にある、ということになる。

そんなことがあるか？

いや、おそらくは無いだろう。

あいつらのことだ、もしそんな力があるのならとっくに『天才』殲滅に動いていてもおかしくはない。

可能性はあるが、俺自身、勘にも近いがそれは違うと思う。

そのかわり、なにか嫌な予感がする。

二人の死が挑戦状・・・。

何に対して？

もしそうなら、それは、本当に『天才』に対してのものなのか・・・

・・・まあ現状では、攻略組という線が有力か。

勘にばっかり頼っていられない。

周りの情報を整理して、最も可能性の高い道を探り出していかないと。

「・・・心あたりが、無いわけでもない。いや、可能性は低いが。」

「な！？　そ、それは本当か！？」

「サクヤ、それって・・・」

「そ。俺があんたに会いに来た目的でもある。勝手な憶測だが、聞いてくれ」

そして今日二度目となるが、トーレンスに俺の考えを全て話した。

話すってことは、俺は、多分ミナもだと思うが、この人に協力するってことなんだろうな。

まあいっか。

どうせ急ぎの旅じゃない。

**それは閑話。主人公が主人公となったときの話。（前書き）**

すいません、もう一回続きます。
でも次に更新するのは本編です。

**それは閑話。主人公が主人公となったときの話。**

銀狼が俺を観察するかのように見つめてくる。

その目はひどく無機質で、冷えていて、見るものに無条件で根源的な恐怖を与えるだろう。

俺でさえ、少し、緊張している。

どんなモンスターや人間と相対しても、ここまでのプレッシャーは感じなかった。

さっきまで何もなかったはずの圧力が、俺がこの狼を『敵』と認識した途端溢れるように流れ出て、俺を押し潰そうとする。

だがその程度では俺を怯ませるなんて不可能。

俺に放ってきた圧力を、真っ向から受け止めた。

すると、驚いたような反応を狼はした。

初めて、このモンスターの生物らしい反応を見た気がする。

だがあくまでも驚いただけ。

ほとんど微動だにしない。

なら・・・

改めて覚悟を決める。

死に対する恐怖は、無い。

そろそろこんな意味もなく目的もなく戦い続けるのに嫌気がさしていたところだ。

・・・いやかつては目的はあったはずだが、いまとなってはそんなものはとうに諦めている。

強敵とぶつかって死ぬ、そんな運命なら受け入れようと思えた。

レベルも同じ。申し分ない。

死ぬか生きるかは、五分五分といったところだろ。

行くか。

敵に動く気配はない。

見た目からしておそらくスピードタイプ。

だが俺だって速さには自信がある。

一瞬の加速(アクセラレート)に、全てをこめた。

そして、一歩を踏み出し瞬間で狼に接近し・・・ようとしたとき、何者かの声に遮られる。

「待て」

・・・ただそれだけの音に、俺は怯んでしまった。

その声には、誇張も一切無しに、本当に物理的な力が存在していた。

結果、一瞬で加速(アクセラレート)を強制的に近い状態で解除させられ、声の続きを待つことになる。

「貴様、本当に人間か？」

「どういう、ことだ」

俺が人間か？

そんなの見れば分かるだろう。

だがそんなことより、その言葉を発したのは誰だ？

この銀狼か？

今この場には俺と銀狼しかいない。

あの少女には、俺の空間に干渉する魔法でこの世界から一時的に切り離して、ここから退席してもらっておいた。

１０メートルくらい後ろの座標にいるが、声が聞こえることもなければ姿も見えない。

というかそもそも気を失わせておいたんだから、あの少女ではない。

だから、消去法的にもこの銀狼以外には、声を発する可能性をもつ存在はいないということになる。

だが、モンスターが人の言葉を話す、なんて俺は絶対にしらない。

なぜか人の言葉を理解するモンスターならたくさんいたが。

このレベルにもなると人間語なんて簡単だとでもいうつもりかこの野郎。

「そのままの意味だが？　貴様は人間か、それとも人間の姿を模った魔物か、と聞いている。少なくとも、人間の言葉は通じるようだ。だが、理解は出来ても話すことの出来る魔物はあまりいないんだが

な。人間の言葉は無駄が多すぎる上に複雑過ぎる」

なんか一人で・・・一匹で？　一体で？

・・・人間の言葉を話せるんだから一人でいいか。

なんか一人で勝手なことを言ってる。

人間の言葉はなんか難しいっぽい。

・・・まあそんなことはどうでもいいが、ここはどう答えるのが得策だ？

どちらを選ぶかによって殺すか見逃すかを決める、だとしたら慎重に決めたほうがいい。

戦闘を回避出来るのならその方が絶対にいい。

だが、なぜか嘘をつくことは許されないような気がする。

それくらい神秘的な雰囲気を、この銀狼は持っていた。

「その前に、一つ聞きたい。お前は、モ・・・魔物か？　お前が人間の言葉を発しているのか？」

「・・・頭はいいようだ。咄嗟に言い換えたのは正解だな。私はどうも思わないが、モンスターというより魔物、と言ってくれた方が

いい。まあ聞くまでもないだろうが、私は魔物だ。こんな姿をした人間などいないだろう？　この世界には人間と魔物、それしか存在しないのだから。そして後の問いに答えると、その通り。私は、どんな存在ともコミュニケーションをとることが出来る数少ない存在だ。ああそれと、貴様が人間か、という私の問いには答えなくていい。魔物のことをモンスターと呼ぶのは人間しかいない」

「そうかよ。そんな流暢に話す、ということは戦う気はないということか？」

「いやそんな訳はないだろう。貴様は殺す」

即答か。

こんな、友好的ともとれる態度をとられた後にいきなり殺す宣言かよ。

随分図太い神経してんなこいつ。

「・・・そ。なら俺もだ。お前を殺す」

「ここまでの力の差を見せつけられ、なお挑むか。面白いな、人間」

「勘違いすんな。俺とお前の間には、力の差なんか無い。やっぱり

分からないのか。俺はお前の強さなんて出会った瞬間に把握していたのに」

「・・・何を言っている？」

「さあな？　まあ俺にはそういう能力があるんだ。人間も魔物も問わず、目の焦点を合わせた瞬間にその存在のレベルを１レベルも違わず理解することが出来る」

「な、そんな馬鹿げた能力があってたまるか！　貴様がもし本当に・・・だったとしても、そんなことが出来る訳がない！」

「・・・ん？　なんか聞き取れなかったことがあったが・・・。出来るんだよ。お前のレベルは見た瞬間に分かった。だがそこまで理解した上で、俺はお前に勝てると判断した。・・・来いよ。たかが魔物程度が俺を殺せるとは思うな。お前の固定観念も全部、俺がひっくり返してやる」

「・・・・・・ならばやってみせろ。私を失望させるなよ人間！！」

あんなに挑発しておいて・・・勝てる保障なんてどこにもない。

それどころか、同レベルの場合は人間とモンスターじゃモンスターの方が有利だ。

死に対する恐怖というものが、根本的なものとして人間にはあるが、モンスターにはそれがほとんどない。

いくら俺が死に対して恐怖はないと思い込んでいても、心のどこかでは死にたくないと思っているだろう。

ほんのわずかの恐怖から生まれる、一瞬にも満たない『躊躇』というハンデは、高レベルの戦いになればなるほど大きなものとなる。

それを考慮に入れると、俺が若干劣勢・・・でもただ負けてやる気は毛頭ない。

死ぬとしても、最低相打ちにはしてやる。

「やってやるよ・・・後悔すんなよ狼野郎！」

銀狼がサクヤに突進し、サクヤも一瞬でそれに対応してみせる。

そして二人は、一週間ほどにわたる長い時間、戦い続ける。

だがサクヤは気づいていなかった。

あくまで自分を劣勢だと思っていたのは、今までの実力だけを発揮したなら、という条件付きだということに。

サクヤはいまだかつて『本気』を出したことはない。

この銀狼との戦いでは自分の真の力を出し切れていないということに気づくこともないし、そして自分の『本気』がどれほどの力を持つのか、ということにもサクヤはまだ気づかない。

## 最強は、人間に何を見ている？（前書き）

シリアスですね。
タイトル変えたほうがいいかもしれません。
そしていつにもまして訳わかりません。
しかもまたもや会話ばかりです。
次話でとうとうバトル入ります・・・
・・・前書きもなんのこっちゃ。

全て話し終え、これからの方針を決める。

場所は変わり、応接間のようだったさっきの部屋から、トーレンスの私室のような所へと移動した。

そこは、生きることに疲れた老人が静かに余生を楽しみたい、という人が喜びそうな部屋だった。

中は、壁も家具も全て木製だった。

まず目に入るのが暖炉。

部屋に入った途端にトーレンスが腕をさっ、と振り、一瞬で大きな火を灯していた。

そこから少し離れたところに揺れる椅子・・・ロッキングチェアーというものが置いてある。

この人は全然老人ではなく、年齢的にも若い。

といっても中年？　ひげさえなければちょっとはしゃいでる禿げかけの４０歳、という感じなのだが、なぜかこの部屋がこの人にはぴったりだと俺は直感で思ってしまった。

なぜかは分からない。・・・謎だ。

俗に言うログハウスなる部屋の中にいると、なんだか眠くなってくる。

が、なんとか眠気を振り払い、俺はさっさと話すことにした。

「まずは人員をどうするか、だな。中途半端な『天才』を入れたところですぐ殺されるのがオチだ。もし黒幕に出会ったりなんかしたら俺でも護り切れないかもしれない」

「俺でも・・・か。サクヤ、わしがなぜお前の名前を覚えていたか分かるか？　前に一度少し顔を合わせただけだというのにだ。現にお前はわしのことを覚えておらんかっただろう？」

確かにそうだ。

俺だって記憶力がない訳じゃない。

こんなにレベルが高いんだし、そういう知能面のステータスだってすごいことになってるはず。

しかも俺にはあまり知り合いはいないし、他人と話すこと自体が稀だから一度話したことのある人間の顔を覚えられないなんてことはない。

それでもこの人のことを、ちょっと見覚えがある。程度にしか認識出来ないということは、よっぽど軽く、それこそ挨拶くらいの会話しかしていないということになる。

その時は余程常識人だったのか。

それであまり印象に残らなかったとか・・・

今のこの姿からは想像もつかない。

無言で肯定を示すと、トーレンスは話し出した。

「わしは、初対面の相手の魔力は必ず調べることにしておる。魔力の状態を見れば、その魔力の持ち主はどのような人間かある程度分かるからな。この能力を買われ、今まで、そしてこれからもだが、なにかやましいことを考えこの街に取り入ろうとしている輩を自ら実力行使で捕らえるという役割を極秘に担っていた。初めてこの街に来る者は必ずわしと会わねばならない、ということだ。お前ももちろん例外ではなかった。一人でこの街にやってきて、『旅をしてたら、ここに着いた』などと言い始めた。・・・『天才』というものは、なぜか互いに引き寄せあう。だいたいの天才はこの馬鹿みたいに広い世界で偶然出会い、それが何度も続き、最終的にこの街に所属している『天才』にさえ出会い、街にやってくる。それがどれだけ低い確率なのかは知らんが、そういう者が大多数、と言うより全てがそうだろう。わしもそうだ。だから、お前のような存在は異

質過ぎたのだ」

話を聞いて、俺は納得した。

「・・・だから、俺を覚えていたと」

「いや、正確には違う。いくら異質とはいえ、わしが魔力を検査し、この街に害があるものだったなら捕らえればいいし、最悪の場合は排除すればいい。ただそれだけだ。だからわしも、お前に出会うまでは大して気にしていなかったのだ。そうでなければ良いなと考えてはいたが」

最後の方は少し声が沈んでいた。

やはりそういう者はいたんだろう。

その能力は周りからすれば確かに便利かもしれないが、持つ者によっては結構な苦痛だと思う。

この人は、そんな能力に喜べるような人間ではなかった。

誰かの嘘を暴くとか、誰かを捕らえるとか、裁くとか・・・

そういう仕事に向いていなかったんだ。

それでもこの街のために自分がすべきことを、自分にしか出来な

いならと、ずっとやり続けてきた。

・・・やばい。

敬語を使ってもいいとさえ思ってきた。

「なら他に理由があったってことか」

「そう。初めてお前に会ったとき、わしは心の底から驚愕し、そして自分自身に失望した。そのときまで自分が不幸だ不幸だと嘆き続けていたことにな。これでもわしは『天才』と呼ばれる者、それなりの過去は持っているし、この街に来たら『天才』は安らぎを得られると聞いていたのにわしだけはここにきてもそんなものはなかったことから、ずっと、自分は不幸なんだと思っていた。やりたくもないことをやらされていたんだからそう思うのは当然だと自分に言い聞かせてもいた」

「別にいいだろ？　普通この街にきたやつらは誰でも楽しく生きていけるはずなんだ。救われるはずなんだよ。でもあんたは・・・」

そう思って当然だと思う。

この人は救われなかったんだから。

なのに遮るようにトーレンスは言う。。

「だがな。・・・サクヤ、わしにとってお前の魔力は、存在は、全てがもう圧倒的だった。わしは初めてみたよ。・・・何一つ憎んでいない『天才』を。お前の魔力は、そうだな。表現しづらいが無理やり言うなれば、優しい黒色と冷たい白色。この世界の何かに、あるいは全てなのかもしれんが、お前は絶望していた。わしが今までにみた中で、何よりも深い悲しみが見てとれた。だがそれでもお前は、何も憎んではいなかった。確かに攻撃的な意思はあったのだ。でもそれは決して憎しみではなかった、あれはおそらく、向上心。そしてこれがわしには最も理解し難かったのだが、お前からは『護りたい』という強い願いのようなものを感じたのだ。過去になにがあったのかは分からないが、どうしてもそれが理解出来なかった。もちろん、今もだ。そしてそれらを瞬時に見抜き、わしは本当に小さい男だったのだと打ちのめされた。わしよりも深い絶望を持っていながらも自分を不幸とも思わず、世界を憎んでいないどころか、何かを護りたいとさえ思っていたお前に。・・・ずっと答えを探していたんだ、これでも。だが世界を、何もかもを憎んでいたわしなぞにわかるようなことではなかった。だから、もしまたお前に会えたなら聞こうと思っていたのだ。サクヤ、聞いてもいいか？　なぜお前は世界を憎んでいない？」

へえ。

おそらく会った時間は短かっただろうに、その短時間でそこまで考えていたのか。

だがこの人が求めているような答えを、俺は言えない。

「悪いけどな。そんな高尚な理由じゃないんだ、生憎と。ただ、俺が幼いころに捨てられたから。2歳になったかどうかって頃にな。でも俺はそのときすでに全部理解していたんだ。俺が捨てられたってことも、捨てられた訳も。赤ん坊の頃にそんな恐怖体験をしたんだ、深い絶望になってもおかしくはないだろ？　あと、親に捨てられたってことで、幼い俺は愚かにもこう考えたんだ。他にも悲しい思いをしてる人がいるのなら、みんな助けなくちゃ、ってな。だからじゃないか？　そんなちっさい時に世界を憎むとか、そういうことは考えなかったんだよ、きっと」

本当は違うが、これも一因となってるのは事実だ・・・と思う。

「それも、随分ダークな話だ・・・が、そうではないだろう。わしの前でそう簡単に嘘をつけると思うなよ？　・・・まあそれが聞けただけで今は満足しておくか」

「そうしてくれ。さっきからミナが置いてけぼりだ」

「そーだよ・・・二人でなんか訳分かんない話しちゃって。まあ、サクヤの過去が少し聞けたから、いいけどさ・・・」

随分膨れているが、別にあまり機嫌を損ねてはいないらしい。

それより、話が脱線してしまった。

というか既に脱線どころの問題じゃない。

「ったく、俺の名前がどうとかの話でなんでここまで話が変わったんだ？」

よく考えればおかしい。

あの流れで俺の名前について触れるきっかけも何もないはずだ。

「ああそれはだな。サクヤのレベルが分からない、ということだ」

「は？」

「初めて会った時も魔力の量自体は巧妙に隠されていたが、お前にわしらを護るほどの力があるのか、という話だな。統合的にみて、お前の魔力の質にも興味があったが『量』にも同じくらい興味があり、その二つの要素が揃って初めて、お前はわしの印象に残ったのだ。お前は、さっきの発言からするとわしらを護るつもりだったろう？　そんなことをお前が言ったから、お前の実力について考えて、そこからお前と初めて出会ったときのことを連想したのだ」

「ああそう」

「で、単刀直入に聞くが、サクヤは今何レベルなんだろう？」

「なんだろう？　じゃねーよ！　そんな馬鹿正直に教えるか！」

「そうだよ！　私だって知らないんだから！」

このおっさんは本当に捉えどころがないな。

騒がしいやつだ。

「んなこたどーでもいいんだっつの！　本題はこれからどうするか、だ！」

「人員をどうするか、だよね！」

「そう！　で、まじでどうするんだ？」

「う、うむぅ・・・二人で行ってきたらどうだ？」

「サクヤ・・・ちょっとこの人ぶん殴って来ていいかな？」

「お偉いさんに手を出したら色々問題になったりして面倒だ。どうしてもっていうなら、服の上から、あざにならない程度にな」

「リアル！！　ちょｗｗおまｗｗｗ・・・・・・・・これは真面目に言っておるのだぞ？」

本当にやろうとしたので俺はミナを止める。

そのときミナが露骨に舌打ちをしていたが、聞かなかったことにしよう。

「でもどうしろと？　俺達は場所も分かんないし、そもそも具体的に何をすればいいのかさえ分からんぞ？」

「場所は教えるさ。何をすればいいかというと、まあ究極的には二人が死んだ原因を突き止めて、人為的なものだった場合はその犯人を見つけ出す、ってところだ」

「でもそんなのどうやって見つければいい？　その二人以外に被害者はいないんだろ？」

「まずは原因究明か。わしらも原因は分からんからな。攻略組の仕業だったなら、本部へ行けばいい。その他の人間や、もしモンスターによるものだとしても、わしらが総動員して敵を討とう」

「ならその原因とやらを探るためにも、まずは二人が被害に合った場所へ行け、と」

「そういうことだ。悪いが、わしはこれでも最高責任者、仕事もある。自ら現場へ行くことは出来ない。それに、今は他の『天才』達も手一杯だ、出来れば人員は割きたくない。だから二人で行ってくれると助かるのだがな」

「そういうことならいいんじゃない、サクヤ。変に誰か加わるよりも二人の方が色々と動きやすいし」

「そうだな。とりあえず俺達で探ってみる。場所を教えてくれ」

「今すぐ行くのか？」

「ああ。こんなことはさっさと終わらせるに限るだろ」

「そうだが・・・」

「大丈夫だよ。ここまでだってのんびり来たから疲れてもいないし」

「・・・助かる。場所は、この街よりも外側の［フリュート］というダンジョンだ。最奥まではまだ到達していない。レベルは５００Ｌｖ．前後。行けるか？」

「ああ。ぶっちゃけ余裕だな」

「私も大丈夫」

「お前達のレベルは、どれほどなんだ・・・？　もしかするとわしよりも高いのではないか・・・？」

もちろん高いさ。

でもそんなことは言えない。

最高責任者なんて絶対なりたくないしな。

「さあ？　まあ朗報を期待しててくれ」

「そうそう！　きっと見つかるよ、原因くらい！」

「そうか・・・どうあれ、とにかく生きて帰ってきてくれ。危なく

なったらすぐ逃げろ。・・・まあそれがいつでも出来たなら、こんなことも起きないのだがな・・・」

「引き際くらい心得てるさ。じゃ、行くか、ミナ」

「うん！　待っててね、おじさん」

「ああ、頼む」

結局俺達はこの人に協力することになった。

こういうの、久しぶりだな。

内容は少し暗いけど、あの人も前向きに頑張ってるし。

そういう人にならいくらでも協力してやるって思える。

・・・・・・パッとしないけど、とりあえず行くか。

## 二人しかいない世界。他に存在するものは、星だけ。（前書き）

更新遅いくせに短くてすいません。
サブタイトルに深い意味は特にないです。
というかバトル入らなかったです。
次は絶対入ります。

**二人しかいない世界。他に存在するものは、星だけ。**

［フリュート］に着くまで丸１日かかった。

トーレンスと話していた場所はこの馬鹿でかい街のほぼ中心で、そこから街の門までは相当遠い。

実は、街に着いてから中心まで行くのにも同じくらいの時間がかかっていた。

この世界の移動手段としては、最高時速８０?程の乗り物の、『車』があるが、俺達の場合はそんなものを使うより瞬間移動を繰り返して進んだほうが早く着く。

流石に、中心付近から外側の門近くへの転移門があるため、それを使ったりしたわけだが・・・こんな大きいのに街ってどういうことだ?

いっそ国でもいいんじゃないだろうか。

小さめではあるけど。

結局目的地に着いたときには日は完全に暮れ、仕方ないからここで一夜を過ごすことになった。

ダンジョンの入り口前の道から横に逸れた、短い草の生えている中に所々に地面がむき出しになっている場所があって、そのうちの一つの平地だ。

俺達が出てきた街の門がまだ見える。

わざわざここで野宿する必要はなく、門の近くで宿でも借りればいいとは思うが、こういうのは雰囲気が大事だと俺は信じている。

「ん・・・あ～！　最近は平和だったからねー。いろいろ大変なことはあったけど、こんな感じの野宿なんて初めてだよね」

揺れている焚き火の炎に手を突っ込んでぷらぷらしていたら、ミナが体を伸ばしながら話し出した。

「いつもは絶対にモンスターとかいない場所選んでるから、なんも警戒しないで寝れちゃうもん。まあここらへんもあんまりいないんだけどさ」

「確かになー」

「平和もいいけど、私達の目的が目的だしね。レベルだって上げないと」

「たかが５００Ｌｖ．程度のこんなところでも、俺達なら簡単に上がるからな」

「でもさ、『果て』って、どれくらい遠いんだろ。どのくらいのレベルが必要なのかな・・・」

「・・・さあ？」

「もー。いいもん。どんなに時間がかかっても絶対見つける。世界で一番に！」

「・・・あれ？　お前ってそんなキャラだったっけ？」

「まあ一番はサクヤに譲ってあげてもいいよ！」

「ミナでいいよ。俺は、見ることができればそれでいいし。ってか仲間増えたらどうすんだよ？」

「後から入ってきた人に譲る気はないよっ」

「そいつからしたら、俺達が後から入ってきた人になるんじゃないか・・・？」

「うーん？」

「悪い、なんでもない」

「そう？　それにしてもこの話、目的とは全然関係なくない？」

「別にいいだろ。いまさら話し合わなきゃなんないことなんかないし。とにかく手がかりを探す、それだけだ」

「そうだけど、役割とかさ、いろいろ・・・」

「まあそういうのは、なんというか、別にな。二人で一緒に探し続けるってだけでいくない？」

「手分けして探した方が効率とか・・・」

「却下」

「えええ！？」

「もう寝るぞー。ほら、火、消すぞ」

ミナはまだなにか言いたそうだったが、火を消滅させると寝る準備を始めた。

俺達の睡眠は、そこらの高級ベッド、まあそこらに高級なベッドなんか転がっているわけではないが、そんなものはおろか『天才』の街［Ｄｅｎｉａｌ（否定する街）］にある最高級のもので寝るよりも快適だ。

少し熱を持たせた魔力を身に纏えば夜の寒さを完全に防げる。

今は夏も終わる頃、夜は結構冷える。

蒸し暑い夜もあるが。

そして身体を横たえるときにも、魔力を柔らかくして自分の下にひいて、あとは自分で微調整をすれば快適ベッドになる。

ただの『天才』程度では、寝ながらそんな魔力の維持も、ここまで思い通りに物質化させることも到底出来ないが、俺達にしてみれば呼吸に等しく簡単なことだった。

・・・はたから見れば、俺達は宙に浮いて見えているだろう。

「サクヤー」

「んー」

「・・・犯人見つかるといいね」

「見つけるんだろ？　お前も怒ってたじゃんか」

「うん、見つける。人を殺したんだから、罪は償ってもらう」

「・・・お前には似合わないよ、そういうの」

「わかってるよ。だから、実際に行うのはサクヤ。私はお手伝い」

「俺も嫌だけどな。ミナがやるよかマシか。まあそんなのは全部あの最高責任者とやらに任せとこう」

「あはは、そうだね！」

俺はふと空を見た。

視界にはずっと入っていたんだろうけど見ようと意識していなかったからか気づかなかったが、星が、空を埋め尽くさんといわんばかりに瞬いている。

本当に、比喩でも何でもなく。

辺りは闇一色なのに、ほんのり優しく、世界が淡く輝いているように感じる。

幻想的だった。

「こうして見てると、手が届くような気がするな・・・」

「サクヤなら届くんじゃない？」

「・・・まだ、無理かな」

「意味分かんないね！　届くわけないし、もし届いたとしてもなんの意味もないのに」

「だーから。こういうのには雰囲気が大事なんだよ」

「はいはい」

本当に綺麗だな。

寝るのが勿体無い気がしてくる。

今までもこれくらいのものは見たことがあるのに、今日は一段と

綺麗に俺の目には映る。

それがなぜかは分からないが、こういったものを探しながら旅をつづけるのもいいかもしれない。

思い出にもなるだろう。

「ミナ」

「うん？」

「おやすみ」

「・・・おやすみ、サクヤ」

## 遡逅。（前書き）

**遊逅。**

本来なら、俺は朝が大嫌いだ。

眠いしだるいし。

だが、夜空が綺麗だった次の日の朝だからなのか・・・いや関係ないだろうが、今朝はいつにもまして清々しい。

今までの俺の人生の中でトップクラスの朝じゃないだろうか。

そんなものにいちいち順位をつける必要はないけども。

まだひんやりとしていて、魔力の膜を解除すると肌寒いが空気は文句なしに澄んでいて、空も晴れ渡っている。

すぐに気温も上がると思う。

木々に囲まれているせいもありついついリラックスしてしまい、緊張感をうまく持てない。

前は注意を怠っていたから攻略組にばったり出くわしたというのに・・・

まあ一応周囲を調べる、が特に危険なモンスターなどはいなかった。

要するに端的にまとめて言うと。

「ふわぁ・・あ。・・・いい朝だなー・・・」

「なーにおっさんくさいこと言ってんの、サクヤ」

「うわ！　・・・ミナ、起きてたのか」

なんだ、起きてたなら俺が目を覚ましたところも見てただろうに。

おはようくらい言ってくれても・・・

「あはは、ごめんね。なんか君が寝惚けてる姿がすごい新鮮でさ」

「寝惚けてたかあ？　俺」

普通に起きて普通に欠伸して、少し独り言を言っただけだと思うが。

「うん。起きたと思ったら1分以上ぼけーっとなんか見えてはいけないものを見てるみたいだったし、そのあといきなり半眼できょろきょろし始めたんだよ？　十分寝惚けてない？」

それは、少し朝について考えた後に周りを調査してただけだっての。

「すっごく面白かったんだけどさ、君って覚醒するの早いんだね。ちょっと挙動不審になってたけどすぐ正気に戻ったっぽいし」

「最初から正気だったけどな？　っていうかお前、俺の寝起き見て何が面白いんだ？　野宿なんかいままで何回もしてただろ。今更・・・・・・・・ああ、そうか」

「すいませんね！　いつも君より起きるの遅くて、君の寝顔も寝起きも見たのは今日が初めてで！！」

いちいち怒るな。怒鳴るな。

何が悲しくて、朝起きた途端にキレられなきゃならないんだ。

少しだけ煽ったのは認めるが流石に理不尽だろ。

・・・まあそれでも全く嫌な気分にならないのは、俺がミナに甘いからなのか？

むしろなんか微笑ましく感じるな・・・。

うーん、これはなんていう病気だ？

「はいはい。でもさ、これからもたまには早起きもしてみれば？」

「今日からは一応毎日するつもりだけど」

「へ？　何で？」

「うーん、なんとなく？　女の子にはいろいろあるのよー♪」

「・・・？」

なんか機嫌がいいな？

よく分からないけどいろいろあるらしい。

ところでかなり遅れたが・・・

「とりあえず、おはよ、ミナ」

「随分遅いね！　うん、おはよサクヤ！」

・・・それにしても、さっきからミナは何を作ってるんだ？

「朝ごはんに決まってるでしょ？」

「・・・」

「分かりやすいんだよ、君は」

「・・・あっそ」

遠まわしに『単純』って言われてるのか、これは。

まあ別にどうでもいいが、朝飯なら喜んで頂くことにする。

「もう少しで出来るからちょっと待っててね」

「いくらでも待つさ」

うん？　ということは、これからは毎日朝飯を作ってくれるのか？

今までは俺が作ってたし。

ミナは結構家庭的だからこういうことも簡単にこなすし、一応『喫茶店』でも料理を作ったりしていたらしい。

でも俺はミナの手料理を食べたことがないから、この初めてのミナの手料理が相当楽しみだったりする。

「ミナー。いつの間に食材確保してたんだ？　もそんなの買う余裕なかっただろ。」

「それがあったんだなー。あのおじさんに会う前にちょろっと。ご飯作ることはずっと考えてたんだけど、材料が無くて困ってて、サクヤに貰うのはちょっとアレだし・・・だからあの街でたくさん買っといたの。隠す必要はなかったんだけど、まあなんとなく」

「お前のなんとなくって結構意味不明だな。別にいいけどな」

「出来たー！」

すると突然、温かくて食欲をそそるいい匂いが噴出すような勢いで俺に向かってきた。

魔法でずっと香りを閉じ込めていたらしい。

「うわ・・・すっげいい匂い」

「でしょー。味も保障するよ！　マスターが絶賛してくれたんだから！」

「へえ、すごいじゃん。・・・じゃ、いただきまーす」

「はぁい」

詳しくは分からないが、簡単にいうとシチュー的な物。

もう絶品だった。

これからは土下座してでも料理はミナに作ってもらおう。

綺麗に全て食べ終え、しばらくミナと他愛のない話をしていたが、そろそろダンジョンに入ることにした。

いくらレベル的に安全だとはいえ、今回は予想外の『何か』、要

するに、本来ならこんなところで死ぬようなへまを犯すようなことはしない世界最強だった二人が死んだ『原因』を見つけることが目的のため、いつも以上に気を引き締めた。

死ぬことは絶対に無い自信はあるが、ミナに少しでも怪我などをさせないように。

・・・少し過保護だろうか、でも気にしない！

「行くか！　油断はするなよ。まあ神経質になる必要もないけどな」

「分かってるよ。ていうか私はサクヤの一歩後ろをついて行くから全然大丈夫」

「だな。まあ後ろからの不意打ちに警戒してて」

「はーい」

そして俺達はダンジョンに足を踏み入れ・・・ようと思ったが、いきなり出鼻を挫かれた。

「な！？」

いきなり虚空に柄も刀身も黒い剣が現れ、俺に向かって音速以上の速さで飛んできた。

片手直剣か。

さほど大きくは無いが、見ただけでは性能まで分からない。

俺のスキルも、武器には効果を成さない。

「ち！！」

紙一重でかわした。

だが俺にはこの程度ピンチにはならない。

あくまで最小限の動きでかわしたというだけ。

狙われているのは俺みたいだから、とりあえずミナとは距離をとった。

そのすきにミナを狙われたとしても助けられるギリギリの距離。

「サクヤ！」

ミナが俺の名前を呼ぶ。

多分、俺の周りに黒い魔力球が無数に漂っているからだろう。

「俺は大丈夫だ！　ミナは敵の捕捉に集中してくれ！！」

だが声も途中でかき消された。

魔力球が殺到し、俺を押し潰さんとする。

俺は両の掌から銀色の炎を生み出す。

これは魔法でもなんでもなく、俺自身の力だ。

炎を帯状に展開し、全ての魔力球を叩きつけて爆散させた。

その時に生じた衝撃波も全て炎で受け止める。

そして間髪入れず、地面を軽く足で踏んだ。

トン、と軽い音がしたが、瞬間、俺の真下で爆発が起こり、地面を大きく抉りながら俺は高速で飛び上がった。

ミナは下、俺は上空から襲撃者を探す。

俺からは特に何も見えない、どころか索敵にも何も反応がない。

だが、

「・・・いた。・・・サクヤ、降りて来て」

とミナが言った瞬間に、俺の索敵にも反応があった。

今、突然現れたということは、瞬間移動でここまでやって来て、さっきのはトラップかなんかだったってことか？

ミナは妙に落ち着いている。

俺は地面に降り立つと、こちらに歩いてくる襲撃者を見据えた。

襲撃者が話し出す。

「今、このダンジョンにくる『天才』はいないはずなんだけどな。あんな事件があって捜査も停滞してしまった今は。なのに君達はここにいる。・・・だから俺の質問に正確に答えて欲しい。俺は今、人もしくは集団を探してる。そこで、君達は白か黒か、俺が探してる奴らなのかどうかを調べたいんだ。勝手に進めて悪いけど・・・じゃ、いくよ。・・・君達は、なぜこんなところにいるんだ？　答えによっては・・・今ここで死ぬことになる」

## 『天才』（前書き）

すいません、テストでした・・・・
時間が・・・・
しかも短い・・・・

『天才』

「・・・は？」

いきなり現れて何訳の分からんことを言っているんだ？

黒髪に黒い瞳、そして全身黒い服と、黒色で統一されているが、わざとらしさ？がなく、なぜかこの少年にしっくりきていた。

といっても今の俺も真っ黒とは言わないが似たり寄ったりの格好だ。

「そんなこと、なんでお前に言う必要がある？」

「ああ、君らに選択権はないよ。あるとしたら、それは生きるか死ぬか、それだけだ。生きたいならさっさと話せばいい。こっちも無駄な時間は過ごしたくないし、こんなこともやりたくてやってるわけじゃないしね。もし死にたいなら・・・まあ、好きにすればいい

さ。逃げるなりなんなりご自由に。そうしたら、俺は君らを殺すことに躊躇はしない。後ろからでも確実に殺す。戦うっていうなら、受けて立つし、」

「待て待て、ちょっと待て。なんなんだ、いったい。いきなり殺すだのなんだの・・・意味の分からないことを勝手にまくし立てるんじゃない。・・・名乗れよ。なにもかも、まずはそれからだぞ」

ものすごい理不尽だ。

ていうか理不尽にも程があると思う。

出会った瞬間、お前らは何者だーみたいなこと言ってさらに答えなきゃ殺す？

・・・やばい、さっきはちょっといきなり過ぎてあまり深く考えられなかったけど、よく考えると理不尽どころの話じゃない。

だんだん腹が立ってきた。

「悪いとは思ってるさ、でも出来るだけ関わらずそのまま用を終わらせたかったんだよ。とっとと質問に答えてくれればそれで済んだのに・・・まあいいか、俺にだって一応常識はあるつもりだし。俺はシオン。レベルは・・・言わなくていいよな」

「ったく、常識あるやつがこんなことするか普通。俺はサクヤだ。

で、こいつがミナ。肩に乗ってるちっこいのは確か、ティナ。特に何かするわけでもない、大人しいやつだ。・・・で？　説明してくれないか。シオン、君はここで何してる？　なんでいきなり攻撃してきたんだ？」

「それはそっくりそのままサクヤに返す・・・というか俺が返されたのか。でも先に質問したのはこっちなんだから、まずはこっちの質問に答えてくれないかな？」

さっきまでの、殺意とまではいかないが『敵意』のようなものはなくなっている。

おそらく、やっと俺達が探している奴らなんかじゃないってことに気づいたのか、それともまだ疑ってはいるがとりあえず警戒を解いたのか・・・。

どっちでもいいが、戦闘は避けられるのか・・・？

「まあ仕方ないか。さっきシオンが言ってた、あの事件関連だ。最強の『天才』が殺された理由、原因の調査の為に俺達はここにきたんだ」

「新しく最高責任者になったあのおじさんに頼まれて来たの。あの人は自分の仕事があるらしいしね」

本当は自分で真実を明らかにしたいんだろうが、最高責任者ともなればそこまでの自由はない。

他の『天才』達のため、［Ｄｅｎｉａｌ（否定する街）］のためにやらなければならないことを全うしている。

だからこそ、俺達はあの人に協力することにしたんだ。

・・・まあそれは置いといて。

「ふうん。トーレンスさんだよな、今の最高責任者。あの人が・・・ね」

「・・・なにか問題でも？」

「う～ん、問題というか・・・あの人は見かけによらず思いやりがある人だ。どんなに切羽詰っていようが、誰かにこんな危険なことを頼むとは思えない、ってだけだよ」

「要するに、信じられない、と」

「そういう訳じゃないんだけどさ。俺だって頼まれた訳じゃないけどその事件のことで動いてるから、人が増えることはあまり歓迎できないんだ。まさかあの人がこんな手段に出るなんて信じられなかったけど、君らは嘘をついてるようには見えない。だから、あの人

には俺から言っておくから、君らはこの事件から手を引いてくれ。このダンジョンもそうだが、敵も強い。普通の『天才』程度じゃ到底お話にもならないんだ」

「じゃああなたは何者なの？　自分はただの『天才』ではない、だから一人でもこの事件を解決出来るとでもいうつもり？」

「まあ普通ではないんだ・・・残念ながらね」

「『天才』なんて皆普通じゃないだろ」

「君らには分からないと思うよ、これぱっかりは。とにかく、街に戻ろう。すぐそこだし、送るから。トーレンスさんに話さないと・・・」

シオンの中で勝手に話が進んでいる。

すでに俺達は調査に参加してはいけないことになったらしい。

まあそんなもの素直に聞くわけもないが、こいつは勘違いしている。

いやそれも色々あるが、一つ、決定的なものがある。

「分かるよ、君の気持ち。その圧倒的な才能のせいで、周りに壁を造って生きてきたんだね」

ミナが言った。

そう、俺達は分かる。

でも、決して同情なんかしない。

むしろ、

「勝手に決めてるなって。勘違いするなよ、シオン。・・・お前は」

少し圧力をかけて俺は言った。

「間違っても最強なんかじゃない。絶対に」

「ちょ、サクヤ・・・」

ミナが焦っているが、これだけは言っておかなくてはならない。

シオンは自分が何より強いと思っている。

今まではそうだったのかもしれないが、いつまでもそんな勘違いをしていたらいつか足元をすくわれる。

俺は無闇に人のレベルを調べたりはしないことにしてるから、大雑把だがシオンの魔力等を調べてみたけど、確かに強い。

俺達のような紛れもない真の『天才』級だ。

でもこれから先、俺達のような人間がこいつの前に現れる可能性も無くはない。

『天才』は互いに引き付け合う。

そんな時の為にも、シオンの明らかに過剰な自信を俺が砕いておいた方がいい。

・・・まあ一番の理由は、ここまで言われっ放しで黙ってられるか！　って話なんだけど、それは仕方ないだろ。

俺だってまだガキなんだから。

「・・・へえ？　ならサクヤ、お前は俺に勝てると思ってる？　本当に？　さっきのは全然本気じゃないけど」

「安心しろ、俺もだ」

「ああ、そう。なら、どっちが強いか・・・試すか？」

もう丁寧な言葉遣いが少し崩れていた。

こっちが素だったんだろうか。

もう完全に戦闘モードに入っていた。

雰囲気でわかる、本当に強い。

まるで空気が物理的な力でもあるかのように俺を締め付ける。

でもまあとにかく、勝負を申し込まれて断るわけがない。

いつのまにか、自分が笑っていることに気づき、罵倒しておく。

ったく、俺がある程度本気を出せる程の人間との戦闘は初めてだからか。

ミナとは戦えないし、もし戦ったとしても瞬殺出来る自信があるから。

「いいぜ。どうせやるんなら、殺す気で来いよ。じゃないと万が一にも俺は倒せない」

「・・・はは、いいね、お前。じゃお言葉に甘えて・・・後悔する

なよっ！！！」

「キャラ、キャラ。崩れてんぞ」

シオンが地面を蹴り、いつのまにか手に持っていた黒剣を正面に構え、俺に突進してきた。

俺も白銀の愛剣を召喚し、しっかりと握る。

刹那、文字通り一秒にさえ遥か届かない程の一瞬後、俺達の剣、白銀の剣と漆黒の剣が衝突した。

・・・その時、確かに全世界が震えた。

## 太陽と闇。闇は絶対に太陽を覆えない。（前書き）

戦闘描写死んでます。
まじで無理です。
そして過去最高の短さです。
これはもう、やばいです。
戦いの結果だけ知ってもらえれば・・・

**太陽と闇。闇は絶対に太陽を覆えない。**

剣と剣がぶつかり合う音が何度も響く。

２秒に一度程のペースで二人は激突していた。

サクヤが銀炎を展開し、頭上に銀色の擬似太陽を形成するが、シオンの無数の闇球が槍に変化し突き刺さる。

そして太陽が炸裂するがその間にも二人は爆風の中で再び剣を合わせていた。

だがその衝撃と爆風が重なって、流石に二人とも絶えられず派手に吹っ飛ぶ。

距離が開いた瞬間サクヤは剣を消して虚空から２丁のこれまた銀色の銃を取り出し、一瞬で両手に持つと全く躊躇せずに連射した。

片手で扱えるような大きさではない銃をいとも簡単に扱っている。
見事に全て命中するが、それはシオンが創りだした闇の壁に阻まれていた。

「俺の能力は闇だけじゃないぞ？」

すでにシオンはサクヤの後ろへと転移を完了している。
そして一気にけりをつけようと、剣を振り下ろす・・・が、

「知ってるさ」

サクヤは振り返りもせずにかわすと、振り向きざま銃を乱射した。

「ぐっ・・・！」

数発当たりはしたが、すぐさま態勢を立て直す、その時にはサクヤは銃から剣にチェンジしている。

「っらぁ！！」

サクヤが銀炎を纏った剣を横に一閃した。

半径１００ｍ以上もある三日月型の太陽がシオンを飲み込む。

派手な音を撒き散らし、ダンジョンの入り口を完全に粉砕しながら遥か遠くの地面がえぐれる。

「う～ん、ちょっとやりすぎた・・・、ッ！？」

超高速で槍化した闇球が頬を掠めた。

「なめんな！！」

シオンが叫びながらサクヤの目前に転移してきたが、そのときにはすでに剣を振っていた。

恐らく剣を振りながら転移したのだろう。

これにはサクヤも焦った。

サクヤに冷や汗をかかせたのはシオンが史上初だろう。

銀狼との戦いのときも、終始余裕があったというのに。

「ちっ！　お前は二刀流かよ！！」

無傷ではなかったがシオンは右手に黒剣、左手に闇で創った剣のようなものをもっていた。

「俺にはこっちの方がしっくりくるんだ。それに、闇の方は応用が利く。・・・こんな風に」

いきなり刀身が歪んだ。

そしてシオンは歪んだ剣を無造作に振る。

また金属音が響いた。

「めんどっくせー！」

かなり離れていたのにも関わらず攻撃を成功させていた。

厄介な力だな、闇って。とサクヤは心の中でひっそり思う。

「まあ俺も使えるんだけどな。」

でもま、と続ける。

「終わらせるぞ」

空間が軋む。

右の掌を中心に、魔力が渦巻く。

本来、サクヤの炎は魔力を消費しないが、組み合わせれば空間に影響を与えるほど高密度のエネルギーを生成できる。

そして太陽を越える太陽が完成した。

「・・・すごいな・・・でも、まだ負けない。俺も、本気で挑む・・・！」

シオンも負けじと魔力を集める。

だが、明らかに二人の間には大きな差があった。

それはレベルによるものなのかなんなのか、二人には分からない。

ただ確実に、シオンはサクヤに劣っていた。

『初めての敗北』は、シオンに何をもたらすのか。

「シオン。・・・死ぬなよ」

「・・・。そうだな、努力はするさ」

二人はまた衝突したが、力は拮抗せず、ただ一方が吹き飛んだからか・・・世界は微動だにしなかった。

**シオン。（前書き）**

一応シオンは主要メンバーです。
未だキャラが定まりません。

**シオン。**

「シオン君も予想以上に強かったけど・・・多分私より強いだろうけど・・・でもサクヤ、君は反則過ぎると思う。本当に君のレベルが気になるよ・・・」

なぜかミナがあきれていた。

「あれ、すでに太陽でしょ。ってか太陽超えてるでしょ。あんなの創れるなんて、最早反則以外の何物でもないよ・・・」

「そんな、人を化物みたいに言うな」

「いやそうでしょう？」

「ならミナも十分、他の人間や『天才』からしたら化物だよ！」

あの、名も知らないＬｖ．７００越えの超巨大モンスターにどでかい大砲ぶっ放したのはどこのどいつだ。

一撃でＨＰ半分以上削ったくせに。

本当にびびったんだぞ。

「そうかなあ？　まあそんなことはどうでもいいよ。それよりシオン君は？　まさか本当に殺しては、いないよね・・・？」

「まあ、あいつも最後になにかしら高エネルギー溜めてたからな、大丈夫だろ。もし無防備でまともにくらったら、ミナはもちろんシオンも余裕で即死レベルのものではあったけど」

「それはまずいでしょうが！！！　すぐ治療しないと！　シオン君！！」

ミナは、シオンが吹っ飛んでいった方に駆けていった。

まあ死んでいないことは分かる。

あいつの生命力、というか・・・そういったものを感じるから。

ただ大怪我をしているかもしれないが、ミナが向かったならまず大丈夫だろう。

「ふー・・・どうなんのかなぁこの事件、そして、これから・・・」

太陽はまだまだ真上には遠い。

早朝とまではいかないが、全然早い時間。

やるべきことはたくさんあるけど・・・今日中に終わればいいな。

まず最初に、シオンの話でも聞くか。

＊＊＊＊＊

「んで？　せっかく早めに仕事終わらせようと思ってたにも関わらずお前が目を覚ました時にはもう夜だったからお前から話を聞くことも出来ずに一日中暇で暇でしょうがなかった、ってどういうことだコラァ！！」

「えええええええぇぇぇぇぇ！？」

俺はとりあえずシオンを背負い投げで１０メートル程ぶん投げておいた。

・・・昨日からベースキャンプにしている地点に俺達はいる。

そして、ミナの手料理も食べ終え（もちろんシオンの分は無い）一息ついたころにようやくシオンが起きて、人を散々待たせたくせにぼけっとした顔で俺達を見てきたからついイラっときて問答無用でぶん投げてしまったのは仕方がないことだと思う。

「ちょっとー！　夜なんだからそんな暴れないでよ。モンスターでも来たらどうするの」

ミナが溜息をつき、俺に言う。

薪が燃える火に照らされているミナの横顔は、なんというか・・・とにかく綺麗で、見とれてしまった。

しばらくぼーっと眺めていると後ろから声がした。

「散々文句言いながら人を容赦無くぶん投げておいて自分は女の子に見とれてるって、それこそどうなの？　いくら彼女だからってさ・・・」

人がせっかくミナを見てたのに邪魔するってどうよ？

「ちっ・・・はえーな、復活」

「そんな露骨に舌打ちしないでくれませんかねえ!?　・・・転移してきたからね。にしても、最悪の目覚めだよ・・・」

「自業自得だろうが」

「それよりサクヤ、シオン君が私を君の彼女と言ったところに突っ込もうか」

「ああ、聞いてなかった・・・・・・、、は!?」

なに!?　彼女!?

ミナが・・・俺の!?

「いやいやいやいや!　何、赤くなってんのサクヤ!!」

「いや、だって・・・」

「ああ悪い、自分から言っといてアレだけど、あんたらみたいなあ

からさまなラブコメは専門外だから他所でやって」

「ならまずあんたが他所に行きなさいよ。ってか、あからさまってなによ！！」

ここは俺達が最初に見つけたところだし、そもそもなんでシオンがもうすでにパーティメンバーみたいになってるんだ？

っていうか、

「別にラブコメなんてしてねえ！」

「あーはいはい。普通こういうのは本人達に自覚ないもんなー」

「サクヤ。こいつ、いらつくわ」

もう一回太陽ぶち込んでやろうか。

俺はなんとなく炎を集めてみた。

周囲の空気が炎に巻き込まれていき、風となって吹き荒れる。

「ッ！！　わかったわかった！！　頼むからそれはやめてくれ！！

・・・軽いトラウマなんだよ・・・」

「変なこと言うからよ。っていうかさ、今のもそうだけど、君のキャラ？がいまいちつかめないんだけど・・・」

「確かに。それにいつのまにか俺達に溶け込んでいるしな」

「んなこと言われても・・・まあ、俺の特技とでも思ってもらえればいいよ」

「人を怒らせる特技？」

「本当にすいませんって！！」

思ったよりミナがこの話題を引っ張るな・・・

俺の彼女扱いされたことを意外と根に持ってるらしい・・・ちょっとショック。

「うん、君が今考えてることは多分勘違いだよ」

「ああ、なんか俺もそんな気がする」

それは二人して俺が単純だと言っているのだろうか。

ミナはいいとしてもシオンにまで言われるのは心外・・・というかムカつく。

っていうか、シオンは本当になんなんだ。

朝は、理不尽に、殺すやらなんやら言ってたのに。

あれは無理してたんだな。

どうせ少しでも自分を強く見せて、事を荒げずに済ませるためとかそんな理由だろう。

「まあそれはいいとして、私さ、ずっと気になってたことがあるんだけど・・・」

そういえば、俺にもある。

会った瞬間に、殺すとかそれ以外にこいつが言ったこと。

「そうそう。お前が初めて会った時に言ってたことだよ。詳しくは覚えてないけど、シオンの話は『第三者』がいるように聞こえたぞ」

「私もそれ。一体どういうことなのか。それも含めて、『君のこと』、それと『君がこの事件について知ってること』を話してくれる？」

それを聞くために、シオンが起きるのを待ってたんだから。

「うーん・・・えっと、おそらくミナも普通じゃないんだよな？サクヤと一緒に行動してるんだから。俺としては、あんたらがなんでこんな強いんだ、とか色々聞きたいことはあるけど・・・負けたんだもんな、俺・・・」

いったん言葉を切るが、腹をくくったのか、シオンは言う。

「分かった。まずは俺から話す。でもその後はちゃんとあんたらのことも話して欲しい」

俺達がうなずくと、シオンは話し出した。

**どんな事件にも黒幕はいる。（前書き）**

短くてすいませんw
笑えねえーw

久しぶりなくせに・・・

**どんな事件にも黒幕はいる。**

パチパチと音をたてて薪が燃える中、雲ひとつ無いため月明かりがよく届くほんのり明るい夜中に俺達は何をしているのかというと・・・

「あーーー！　また負けたああ！！！」

「シオン君、弱すぎ・・・」

ミナが心底あきれた声で言う。

「お前ら組んでるだろ、絶対組んでるだろ・・・！」

「負けっぱなしの人間って、なんでまずその理由を相手のせいにするのかなあ」

「だってそうだろ！？　始めてからずっと俺しか負けてないんだから疑うに決まってんじゃん！！」

なんてシオンは言ってるが、もちろん俺達は組んでるわけでもなければ、イカサマだってしてない。

これは確実に、『運が病的に悪い』だけだ。

「もうやめ！！　トランプなんてやーめた！！！」

「ワガママだなぁ、お前」

そう、トランプをしていたわけだけども、これが面白いくらいにシオンが弱い。

はったりもばればれな上に、実際手札もしょぼい。

いろいろなゲームをしたが、全てにおいて弱かった。

言っちゃなんだけど、ここまで運が悪くて、よくこんな世界でしぶとく生きていられたな、と思う。本当に。

確かに大きすぎる力はあるが、戦闘で死亡とかじゃなくて、こう・・・不慮の事故？とかであっさり死んでもおかしくないレベルだ。

それすらも全部『天才』の力でねじ伏せてきたのだろうか。

だとしたらこの先、本当に不安だ・・・。

多分、何かの拍子でぽっくり死んでも、『ああ、ついに・・・』とか俺達は思うにちがいない。

これほど、一緒に旅をする仲間として不安な人間はいないだろう。

なんでこいつと旅をする羽目になったのか、そしてトランプをすることになったのか・・・その原因は全部シオンにある。

＊＊＊＊＊

「まず、サクヤとミナ。二人は一つ勘違いしていることがある」

シオンはしょっぱなから俺達に喧嘩を売った・・・っていうのは冗談だけど、なぜか子供の間違いを諭すように言うから少しイラっときたのは俺だけみたいだ。

ミナは全く気にしてない。というか気付いてないといったような感じだった。

「え？　何いきなり？　それはこの事件のことで？」

「そう。結構決定的なことだ。あんたらくらいにもなったら気付けるもんだと思ってたけど・・・どうも分かってないみたいだからさ」

「俺は気付いてるぞ、多分。現場を見てみないと分からないからトーレンスさんやミナには言わないでおいたんだけど」

なんとなくだが予測はついてる。

でもそれは二人が誰に殺されたかではないし、なぜ殺されたかでもない。

「どういうこと、サクヤ？」

「俺はあのとき加害者についての予想でこう言っただろ？　1、実力だけはあったが、頭は悪い集団。2、ばれても問題ないほど実力に自信があるか。3、挑戦状の一種。で、俺は3が一番怪しいんじゃないかと言った。でも、それは厳密にいうと少し違う。確かに挑戦状なのかもしれないけど、何かイレギュラーな要因がある可能性がある。トーレンスさん達『天才』がまだ気付けていない事実が」

「でも、だったら私達にその要因を知る方法はないでしょ？」

「そうだけど、予想は立てることができるだろ？　まあ、そうだな・・・例えば、『二人は実は死んでない』・・・とかさ」

シオンがかすかに身を捩った。

ビンゴ、か？

「な！？　そ、そんなわけないよ！　だってトーレンスさん程の人が自分で、し・・・死体、を調べたんだよ？」

確かに信じられないことではある。

俺も一つの予測として少し考えていただけだ。

でもどうしてもそれが気にかかって、どうにか死体を調べられないかと色々と（黒いこともね、一応）してみたが結局無理だった。

「あの人でさえ気付けない程の死体、もしくはそう見せるための幻術か何かを行う技術を持っている人間の存在。そしてそれがこの事件の本質。・・・これが、俺がたてた予測の全てだよ」

そんな人間がもしいるとしたら、それは『天才』を超えた、俺達のような真の『天才』しかいない。

何人いるかは分からないが、そいつ、またはそいつらが黒幕という可能性をこっそり考えていた。

確証は全くなかったけど、シオンの反応を見ると・・・

「なんだ、ちゃんと気付いてるじゃん。俺に事件について話せとか言っときながら。ただ確証を得たかっただけかよ。・・・そう、二人は死んでなんかいない」

「そんな！　じ、じゃあ、今すぐ助けに行かなきゃ・・・！」

「まだだ。ちょっと待って、ミナ。だとしたら一つ確認しなきゃならない。知ってる範囲でいいからさ。二人は死んでいない、それが事実なら、それは『生かされて』いるのか？　・・・それとも二人

は、クロなのか？」

もうだいたいは分かる。

全てが本当に最悪な方向に進んでいる。

俺の予想通りに。

そして多分、『黒幕』のシナリオ通りに。

「もちろん、クロ。二人は死を装って街から出て、『黒幕』に取り入った。これが真実だよ」

＊＊＊＊＊

とまあこんな話があって、仕方ないから原因究明まで一緒に行動しようということになって、暗い雰囲気が嫌だったのか、ミナが急に「と、トランプしよう！」とか言い出したからこんな感じになった、というわけだな。

「あーぁ、なんか先行きが怪しくなってきたなあ」

「シオン君のせいだよね、サクヤ」

「だな」

「あーもういいやそれで・・・お前らめんどくさい・・・」

随分態度がでかいな。別にどうでもいいけど。

シオンもミナもすでに夢の中。

随分気楽でいいな、とちょっと思った。

なんか大きな事件になってきたけど、俺達は世界の果てを見るためにただのんびり旅をしていたいだけだ。

こんな事件、さっさと終わらせるに限る。

なんて、半覚醒な状態でミナの寝顔を見ながら考えていた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1163l/

---

ゲームな世界！

2010年10月9日07時12分発行